

# 飯豊天皇 埴口丘陵墳塋護岸その他整備工事に伴う事前調査

## はじめに

飯豊天皇陵は奈良県葛城市北花内に所在する前方後円墳である。奈良盆地の南西部に位置し、本陵西方には奈良県と大阪府を隔てる葛城山地が南北に走る。その山腹は東の奈良盆地に向かって急傾斜をなして下っているが、本陵付近においては、ごくならかな傾斜となっている。周辺には単独の前方後円墳のほか、群集墳の存在も顕著である(第1図)。これらは比較的傾斜の急な山麓、あるいは緩斜面へと角度が変わる傾斜変換地に築造されているため、奈良盆地への眺望が開けており、本陵とは対照的な立地である。そのため、特に前方後円墳においてその違いが築造の背景を表すという見解も示されている(1)。

墳丘は現状で長さ83m、後円部径40m、前方部前面幅80mを測る。主軸は北から時計回りに約45°振れており、後円部が地形の低くなる北東、前方部が高くなる南西を向いている。平面形態は後円部の径に比べて前方部幅が広がっている点に特徴があるが、立面をみた場合、傾斜が通常の墳丘では考えがたいほど急斜面であることから、本来の形態をどの程度留めているのか判然としていない(2)。墳丘裾と墳丘最高所の比高は約8mである。また、墳丘の周囲には盾形周濠と外堤が廻っている。

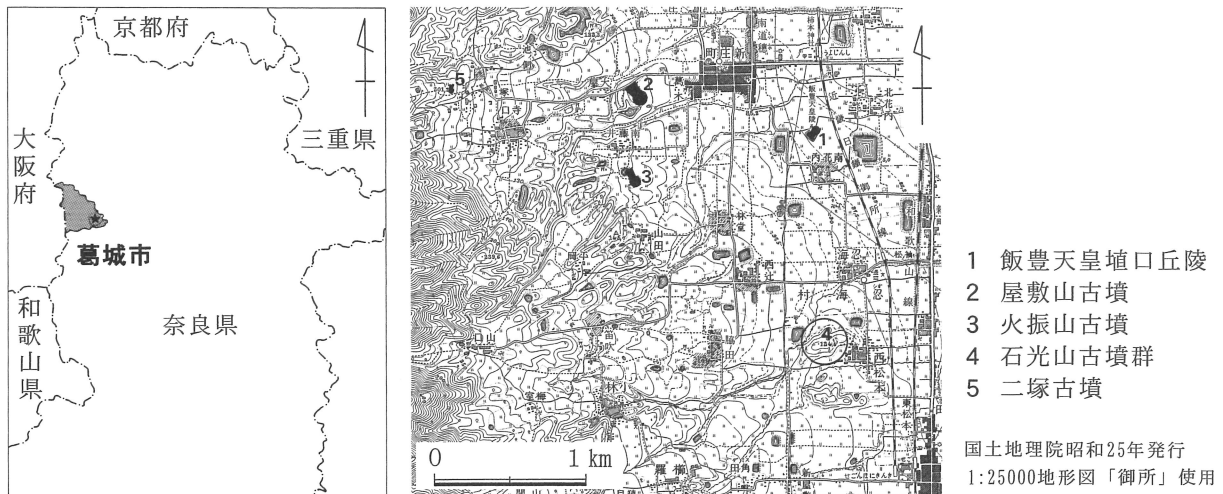
ところで、本陵については、過去に当庁と奈良県立橿原考古学研究所によって外堤周辺を中心に発掘調査が行われている(3)。各調査とも、現外堤の下や外側にも濠内堆積土が確認されることから、周濠は現状よりも広くなり、外堤が築造当初のものではないという知見で一致している。また、出土遺物としては笠形木製品のほか円筒埴輪や人物埴輪・盾形埴輪の破片などが出土している。

本陵の墳丘裾部は経年の波浪による浸食が進み、一部は崩落し、また崩落が危惧される箇所が多数認められるため、墳丘裾の保護を目的とした護岸工事が計画された。それに伴い事前に施工予定地内の遺構・遺物の存否を確認し、工法の検討に必要な所見と共に本陵に関する考古学的データを得る目的で、発掘調査を実施することとなった。調査は平成17年11月7日に着手し同年12月9日に終了した。調査期間中には現地において工法検討会議を開催し、陵墓管理委員である白石太一郎・綱木亮介の両氏に、それぞれ考古学・土木工学の立場から、工法についてご意見・ご指導を賜った。トレンチ内から出土した石材・墳丘裾の石材については奥田尚氏に鑑定いただいた。その結果については、後掲する。

また、葛城市教育委員会の吉岡昌信・神庭滋両氏には、周辺の遺跡の状況や土層の性格など多くの御教示を賜り、本陵から出土した中～近世遺物の所見については、大和郡山市教育委員会の山川均氏より御教示を賜った。記して感謝申し上げます次第である。

なお、調査中に発表した表記・所見と異なる場合は、本報告を優先されたい。

(清喜裕二)



第1図 埴口丘陵 位置図および周辺遺跡地図

# 1 トレンチの設定方法と基本的な層序

## (1) トレンチの設定方法

墳丘の各所に12箇所の特レンチを設定した(第2図1)。当初、墳丘から濠内の状況まで出来る限り把握できる規模で設定する計画であったが、濠幅が狭いうえ絶えず湧水を伴っていたため、調査開始時点では、特レンチの壁を維持できないほど軟弱な状態で、特レンチの設定には相当苦慮する状況であった。そのため標高の低い後円部側では、調査期間後半まで十分に水がひかず、特レンチの規模は概して小さいものとなっている。また、墳丘斜面が崖状であるため、無理に墳丘側に伸ばした場合の掘削深度の危険性が懸念されるという問題もあった。

特レンチの設定にあたっては、あらかじめ陵墓地形図上で現状の墳丘主軸を決定し、それに従って現地でも測量の上、まず主軸上における第6・11特レンチの位置を定めた。その後、第1・10特レンチは前方部端の状況、第5・7特レンチは後円部側面の状況を把握するために設定した。さらに、第4・8特レンチはくびれ部の状況、第3・9特レンチは陵墓地形図上で造出の存在を思わせる等高線が認められたので、その有無を確認する目的で設定した。

ところで、陵墓地形図をみると墳丘周縁はおおむね急傾斜であるが、通有の墳丘立面から考えてこの墳丘斜面は明らかに不自然であり、盛土されている可能性が高いことから、本来の墳丘裾は現在の墳丘裾より内側にあることが予想された。そのような見通しのもと、前方部前面のうち南隅が平坦面であり、比較的奥まで特レンチを設定できることから、第2特レンチでは前方部側面、第12特レンチでは前方部前面における本来の墳丘裾を確認する目的で、それぞれ位置と規模を定めた。

このように、各特レンチはそれぞれの目的に加え、現地地形や湧水の状況などを勘案した上で設定しているため、特レンチの規模・間隔や密度が場所によって異なっている。

## (2) 基本的な層序

今回の調査で認識できた土層の堆積状況は、各特レンチでおおむね同じであり、場所によって極端に異なる状況は認められない。概略は以下のとおりである(第2図2)。

I層 表土。現在の墳丘上面を覆う腐植土層。

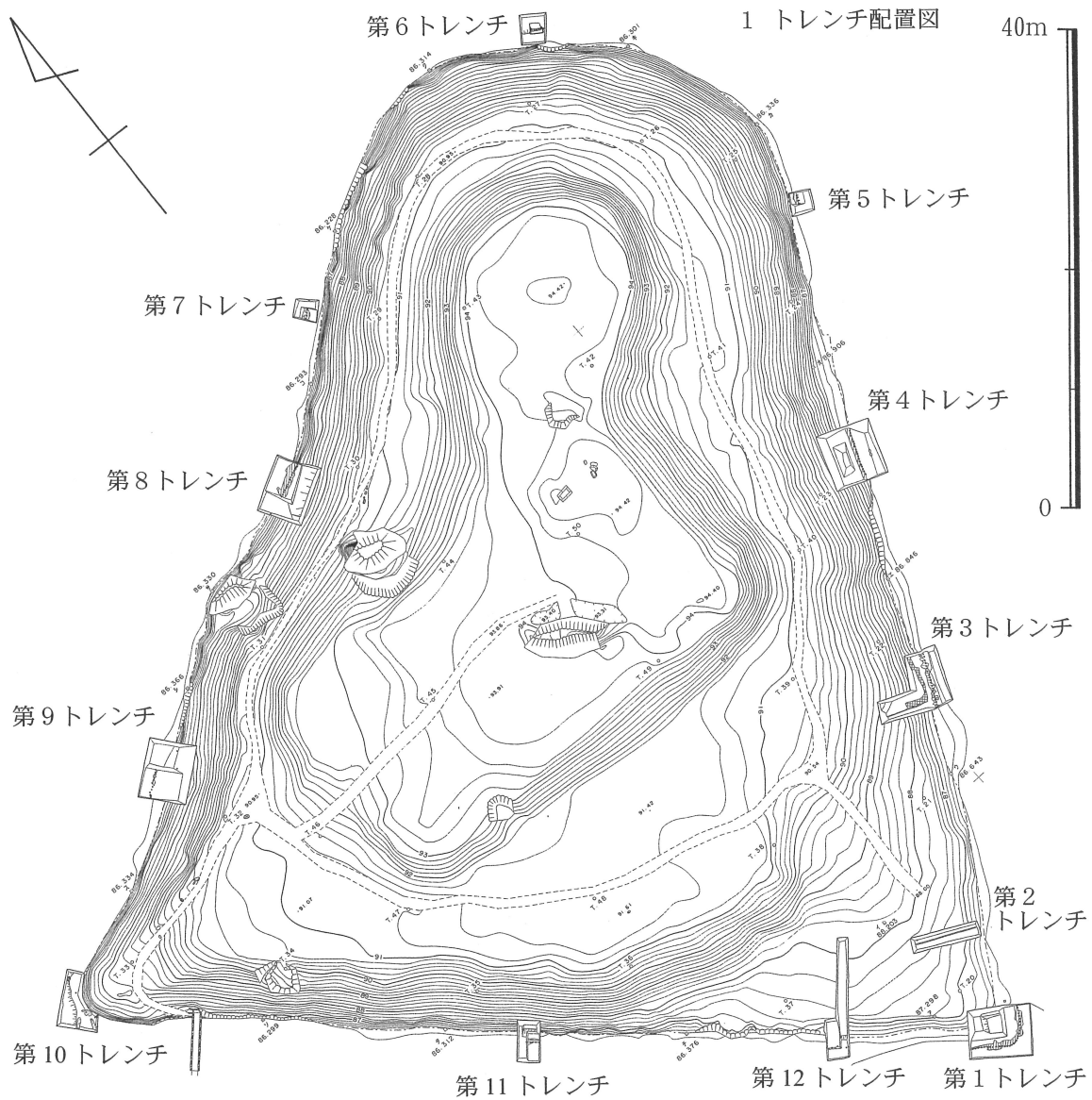
II層 濠内の表土。現在の濠上面を覆う腐植土層。

III層 大正元年に行われた墳丘裾への杭列設置工事以後の濠内堆積土。工事に関わる公文書が残っており、杭列の設置に先駆けて浚渫を行ったことがわかっている。墳丘南側面は、概して工事図面等に示された規模より大きく掘り込まれているが、杭列の背後がいったん深く掘り込まれたことによる段が形成され、この点が工事図面等と一致している。遺物は現代までのものを含む。

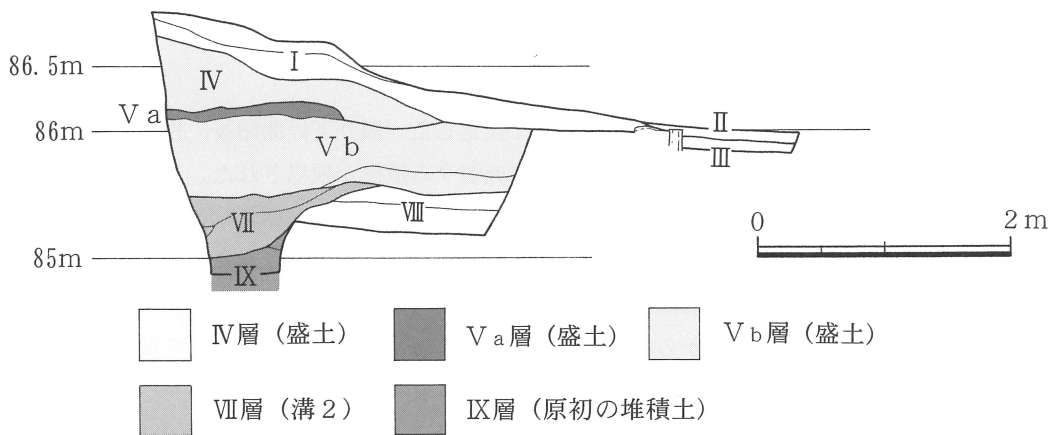
IV層 「文久の修陵」<sup>(4)</sup>時の盛土。特レンチの範囲内だけでも厚さ2mに達する箇所がある。細かい盛土単位は認められず、一気に盛土されたと考えられる。幕末期までの多様な遺物が含まれるが、陶磁器類が比較的顕著である。第1・2・12特レンチではⅢ層に含まれるものと同じ遺存状態の埴輪片が多数含まれており、盛土にあたって新たに周濠内を掘削することで生じた土砂を利用したと考えられる。

V層 「文久の修陵」が行われるまでの地表面を形成していた盛土。Va層は、黒褐色を呈する旧表土で、墳丘上に三歳山諸鉞八幡宮(以下、「八幡宮」と呼称する)が造営されていた時期の地表面に相当すると考えられる。現在の墳丘裾レベルに対応する。Vb層は、粘質土と砂質土の違いで分層できるが、Va層も含め大きな違いはない。なお、V層の間にⅢ層が入り込んでいる状況になっているが、これは濠水の波浪などにより、墳丘裾が抉られたために生じた崩落や流出によるものと考えられる。

VI層 掘込みの埋土。第2・9特レンチでのみ確認されている。Ⅶ層の上面から掘り込まれた遺構であり、Ⅶ層が埋土となっている溝と位置が重なることから、その溝が再掘削されたものである可能性もある。端が断面にかかっているだけなので、規模や性格は不明であり、明らかな溝として扱うのは難



2 基本的層序 (第1トレンチで例示)



第2図 埴口丘陵 トレンチ配置図 (1/600) および基本的層序断面図 (1/60)

しいが、本報告中では便宜的に「溝1」として記述する。

- Ⅶ層 溝の埋土。石積遺構を保護するため掘り下げなかった第3トレンチを除き、すべてのトレンチで確認された。Ⅷ層やⅨ層を切り込んで掘削されている。第8・11トレンチなどの状況から本来の墳丘裾を削って掘り込まれているようである。基本的に粘土と砂が交互に堆積するような状況を示し、人為的に埋め戻されたのではなく、自然に埋没したと考えられる。遺物の量は概して少ない。詳細は後述するが、溝の掘削時期は中世であると考えられる。以下、「溝2」として記述する。
- Ⅷ層 原初の堆積土(Ⅸ層)が形成されて以降、溝が掘削されるまでの間に堆積した土層。粘質土を主体とする。前方部前面部付近にあたる第1・2・10トレンチでのみ確認されている。
- Ⅸ層 墳丘築造からそれ程時期を隔てずに形成された原初の堆積土。古墳時代の遺物のみを含むが、3つに細分された層ごとで、遺物の包含状況がめまぐるしく変わる。外堤の調査<sup>(5)</sup>で示されたⅥ層は本報告のⅨa・Ⅸb層に対応する。
- Ⅸa層：植物遺体を高い密度で含み、暗茶褐色を呈する。埴輪片や転落した葺石も含むが、量は僅かである。
- Ⅸb層：植物遺体は顕著であるが、a層に比べると密度はかなり低く砂質土が主体を占める。一方、大量の埴輪片や土器を含んでおり、Ⅸ層に帰属する遺物の大半がb層から出土している。また、転落した葺石も多く認められ、その多くはc層直上で検出された。
- Ⅸc層：墳丘築造直後の崩落土。地山であるⅨ層の直上に堆積する暗茶褐色砂質土。植物遺体をb層と同程度に含む。転落した葺石の数がごく僅かであり、遺物も含まれていないことから、墳丘が大きく傷み始める以前と考えられる。もしくは墳丘の立地が湧水のひどい場所であるため、墳丘築造に並行して、既に一部が崩落し始めていたことで形成された可能性もあろう。
- X層 地山。砂と粘土の堆積で形成されている。遺物の出土は認められず、第8・9・10・12トレンチの状況などから、主として砂が主体をなすと考えられる。古墳時代以前の包含層の可能性も考えられるが、それを示すような遺物の出土は認められなかった。(清喜裕二)

## 2 各トレンチの状況

トレンチの掘り下げは、まず平坦面に設定した第2・12トレンチから始めた。これは、当初濠水が抜けきらない状況で濠内の調査が非常に困難であったこと、両トレンチには、現墳丘裾より内側における本来の墳丘裾の有無を確認する目的があり、その結果によって他のトレンチの位置や規模の変更も視野に入れるなど、以後の調査のための指針を得る必要があったという理由による。

以下、基本的にトレンチ番号順に記述を進めるが、関連するトレンチについては順次繰り上げて、まとめながら記述していきたい。

### (1) 前方部南西隅

#### 第1トレンチ(第3図1 図版3-1)

前方部前面南側の隅に長さ5m×幅4mの規模で設定した。掘り下げ開始後、程なく現在の墳丘裾に沿う形で、松杭列とそれに絡ませるように石英閃緑岩を充填する遺構が検出された。これは、大正元年に施工された護岸工事により構築されたもので、詳細は明治45年大正元年『工務録』二(諸陵寮出張所)により知ることができる。この杭列と充填された石は、他のすべてのトレンチで検出された。この時点で、先に調査を開始していた第2・12トレンチの土層断面の様相がかなり明らかになり、本来の墳丘裾が、現在の濠内に存する可能性は低いと判断できたことから、最終的に大正期の護岸杭列の内側について重点的に掘り下げることとした。

土層は、平坦面の墳丘裾であるためⅣ層は薄く、その下にほぼ水平にⅤ層を検出した。旧表土であるⅤa層は明瞭に認められるが、濠側に向かって途切れている。Ⅴ層は厚さ60～70cmで、除去するとⅧ層に対してⅦ層を埋土とする溝2が掘り込まれていることが確認された。溝2は現状で深さ約50cmを測り、Ⅸb層ま

で掘り込んでいることが判明した。幅は反対側の立ち上がりが確認できていないため不明である。その後、掘り下げにつれて湧水が激しくなったため、法面をつけつつ掘り下げたが、壁の崩落が進行するため、最終的に築造時の濠底面(地山面)までは到達していない。しかし、確認した最下層がⅨb層であることから、濠底面までは数十cm程度と考えられる。

遺物は、埴輪を中心に陶磁器の破片などが出土している。各層位とも埴輪が多くを占め、陶磁器類は少数であるが、もっとも新しい濠内堆積土(Ⅲ層)では比較的陶磁器類がまとまっている。埴輪については、Ⅴ層に比べて上位に堆積しているⅣ層の方が埴輪片の量が多く、器面など遺存状態が良好で大きな破片が出土した。これは、第2・12トレンチでも同様であり、前方部前面南隅の平坦面一帯が同じ条件で一度に盛土されたことを示している。さらにⅨ層で出土する遺物の状態と同じであることから、Ⅳ層は、濠内堆積土をⅨ層まで浚渫することで得られた盛土で形成されていると考えられる。Ⅶ層は遺物量が少ないが、瓦質土器の破片(第19図94・95)が出土している。

### 第2トレンチ(第3図2 図版3-2)

前方部前面南側の隅から約8m離れた前方部南側面に長さ6m×幅2mの規模で設定した。濠際の状態が悪いことと、本来の前方部側面が現墳丘内に存するか否かを確認するという目的から、本トレンチは濠にかかっていない。比較的厚いⅠ層を除去すると、Ⅳ層が現れ、墳丘側から濠側へと順次盛土していった状況が明瞭に観察される。Ⅴ層は第1トレンチと同様、ほぼ水平に検出された。盛土の単位は明らかではなく、水平になるよう意識的に均しながら盛土した可能性があり、Ⅳ層と対照的な状況をみせる。Ⅴ層の盛土開始面もまた水平である。この面は、平面的にはⅦ層が広く検出され、北よりに僅かにⅥ層が認められた。断面を見ると、Ⅷ層を掘り込んだ溝2にⅦ層が堆積し、さらにⅧ層全体を覆っている。溝2の掘り込み面での幅は約3mである。Ⅶ層には溝1が掘り込まれ、Ⅵ層が堆積しており、一連の先後関係がよくわかる。溝1はそれほど深い遺構ではないようである。

なお、溝2の北側法面に径5cm程度の杭が打ち込まれている状況が確認された。しかし、列をなすのか否か、杭列であった場合の間隔や方向などは不明である。

遺物の様相は基本的に第1トレンチと同じである。Ⅳ・Ⅴ層に包含される遺物は埴輪が多く、中近世遺物が少量含まれる。埴輪の遺存状態は良好なものが多い。

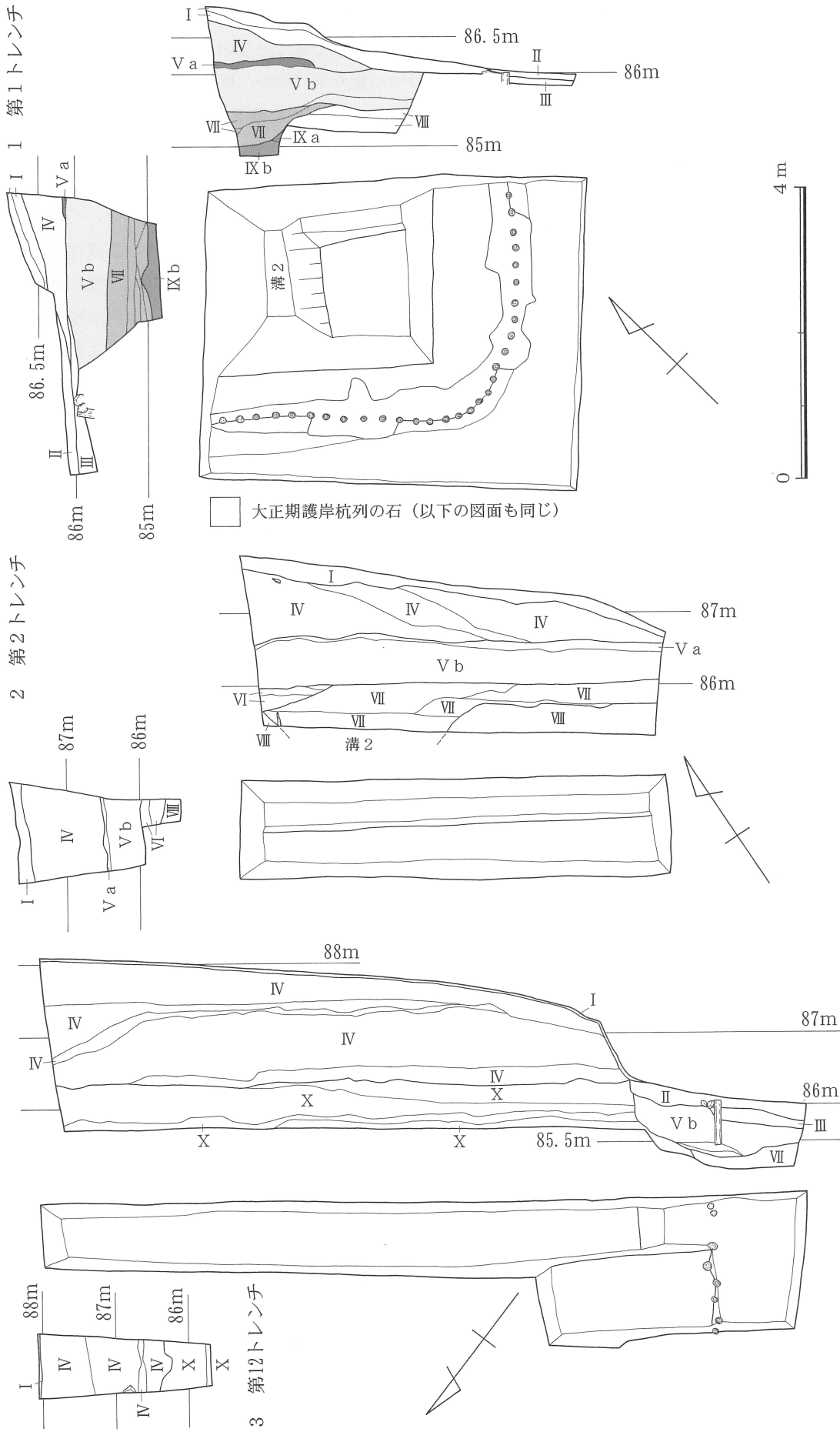
### 第12トレンチ(第3図3 図版7-3)

前方部前面の南寄り、第1トレンチから10m離れた位置に、長さ10m×最大幅2mの規模で設定した。土層は、墳丘内において薄いⅠ層の下に、調査範囲内で厚さ最大1.7mのⅣ層が盛土されている。盛土は大きな単位でしか認識できないが、下位2/3は、墳丘裾に沿って幅約8mと広く土堤状に盛られた後、墳丘内側を埋める手順が確認される。Ⅳ層の下はすぐにⅩ層となる。Ⅹ層は、十～数十cm単位で、細砂・粗砂・粘質土・粘土がそれぞれのまとまりをもって堆積している。濠内はやや厚いⅡ層の下にⅢ層が確認される。Ⅲ層検出とともに大正期の護岸杭列も確認されている。その下は、他のトレンチ同様Ⅴ層が確認されるが、相違点として現墳丘の中まで延びていかない点が挙げられる。また、いったん墳丘裾付近から大きく掘り込んでから盛土している点も特徴的である。この掘り込みによって、溝2の埋土であるⅦ層は大きく削られている。本トレンチではⅨ層は確認されていないため、築造時の濠底面は不明である。

本トレンチにおける以上の所見から、以下の2点を指摘できる。

もっとも近い第1トレンチのⅤa層の標高が86.2mであり、本トレンチの墳丘内のⅩ層上面とほぼ同じ高さである。本トレンチではⅤa層が認められないことから、Ⅳ層形成以前に削平を受けていると思われるが、本来は現濠内に残るⅤ層上面と墳丘内のⅩ層上面は一連のものであった可能性が高い。Ⅴ層が「八幡宮」の存続期間中の地表面と考えられることから、この前方部前面南隅付近にある現在の平坦面(後述する平坦面③)は、「八幡宮」の存続期間より後に造成されたと考えられる。

もう1点は、地山であるⅩ層の検出レベルが、現墳丘内で標高86.3m付近であり、この高さは他のトレンチでのどの地山検出レベルよりも高い。よって、地形的に高まっていることを考慮しても、このレベルを本



第3図 埴口丘陵 トレンチ平面図・断面図(1) (1/80)

築造時の濠底面と考えることはできず、少なくともV層形成以前の掘り込みがなされた現墳丘裾付近までは、本来の墳丘があったと判断できる。これに第11トレンチのⅨ層の位置も考慮に加えるならば、大きく濠側まで墳丘が延びる可能性は低く、本来の墳丘裾は現墳丘裾と大きくは変わらない位置にあるといえる。

遺物は、Ⅳ層から多量に出土している。埴輪の出土量と遺存状況、陶磁器類の出土量など、第1・2トレンチと同様の傾向を示す。濠内堆積土(Ⅲ層)では陶磁器類の比率が増す。また、溝2の床面直上(Ⅶ層)から土釜片(第19図89)が出土している。

## (2) 前方部南側面

### 第3トレンチ (第4図 図版3-3、4-1~5)

前方部南側面に最大長6m×最大幅5mの平面L字形として設定した。造出が存在する可能性が考えられたため、現地の地形の状況を見て場所を決め、かつ比較的傾斜が緩やかであることから、墳丘側に深めにかかるようにした。

土層は、Ⅰ層の下に、厚さ2mに及ぶⅣ層が検出された。盛土単位の検討の結果、傾斜をもって盛られており、濠側に向かって下ると同時に、前方部側に向かって下ることが確認された。またⅣ層には、陶磁器類が一括して投棄されたような状況で包含される箇所があった。その下に、Ⅴ層が緩傾斜ながら墳丘側に立ち上がっていく状況が認められた。

遺構として、Ⅴ層上面において石積遺構が検出された。この遺構はL字形に検出され、墳丘内に潜り込んでいく東西列と現在の墳丘裾に沿う南北列で構成されている。

東西列は、現状で長さ約2mを測り、2段分、高さ約60cmが遺存している。石積み全体の検出状況と共に、東西列東端の石が角石を意識しているような角張った形状を呈することなどから、東西列の東端が南北列との屈曲部であることは間違いのないと思われるが、西端は途中で途切れている可能性が高い。各石のひかえの薄さから、本来の石積み自体もそれ程高いものではなかったことが推定されるが、現状は少なからず破壊された結果と考えられる。また、立面図からも明らかなおと、石積みの設置レベルは墳丘側に向かって少しずつ上っており、西端の石にいたっては明らかに接地面を高くしていることがわかる。対向する土層断面も墳丘側に向かって立ち上がりを見せており、何かしら墳丘へ上がっていくための道状の遺構が存在していたと考えられる。

南北列は、検出範囲が長さ約4m、残存する高さは最大でも40cm程度である。屈曲部付近では一部途切れている箇所もあり、大きく破壊されている。現状で東西列のような大きさの石は認められず、東西列の裏込と同程度の石材だけで構成されている。このため、本来同様の石が使われていたのか、裏込だけが残されたのか判然としない。しかし、北端付近はある程度面をなして積まれている状況が観察され、瓦片も裏込めとしてではなく明らかに石積面の一部をなしていることから、南北列に関しては、当初から使用されていなかった可能性が高いと考えられる。

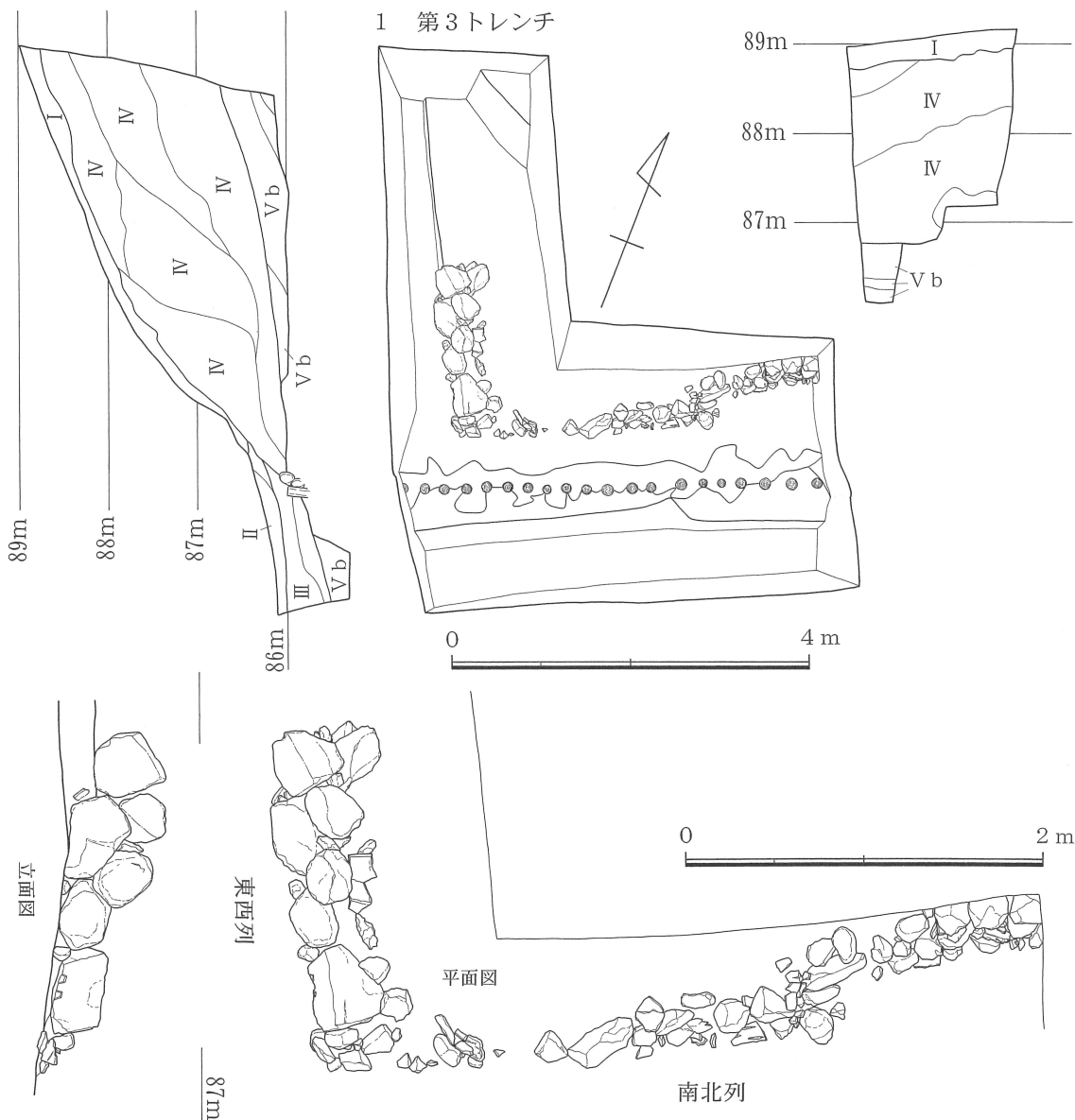
遺物は、多くがⅣ層から出土した。陶磁器類が一括して投棄されたような状態のところがあったことにもよるが、埴輪の比率が低く陶磁器類が多くを占める点に特徴があろう。また、漆器1点や鉄製品も出土している。その他、石積遺構に多くの瓦片が構築材として使用されていた(第20図129~131)。

## (3) くびれ部

### 第4トレンチ (第5図1)

南側くびれ部に長さ4.6m×幅5mの規模で設定した。現状で墳丘斜面は急傾斜であり、この斜面を形成するⅣ層は第3トレンチ同様に厚く、約2mを測る。3層に分けられたが、奥壁を観察すると緩やかながら全体に後円部側へ下る傾斜を示すことがわかる。Ⅳ層を除去するとⅤa層が面的に検出された。墳丘に向かってわずかに上がっていく傾斜を示す。

ここまで掘り下げた時点で大正期の護岸杭列等が検出されたが、そのまま全体を掘り下げると奥壁が高くなり過ぎ危険であること、杭列等が完全に破壊されてしまうことなどから、当面杭列等を残しつつ、濠側について掘り下げを進め、様子を見ることとした。杭列より前面は濠内に相当するためⅤ層は途切れており、

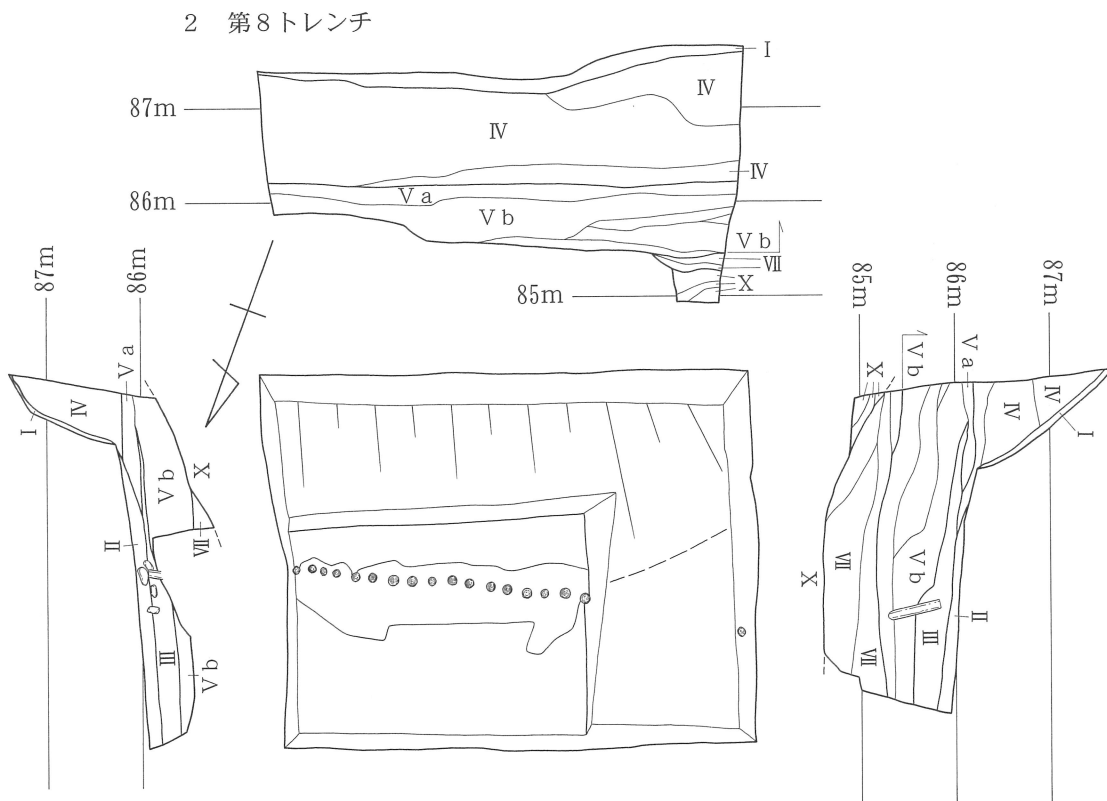
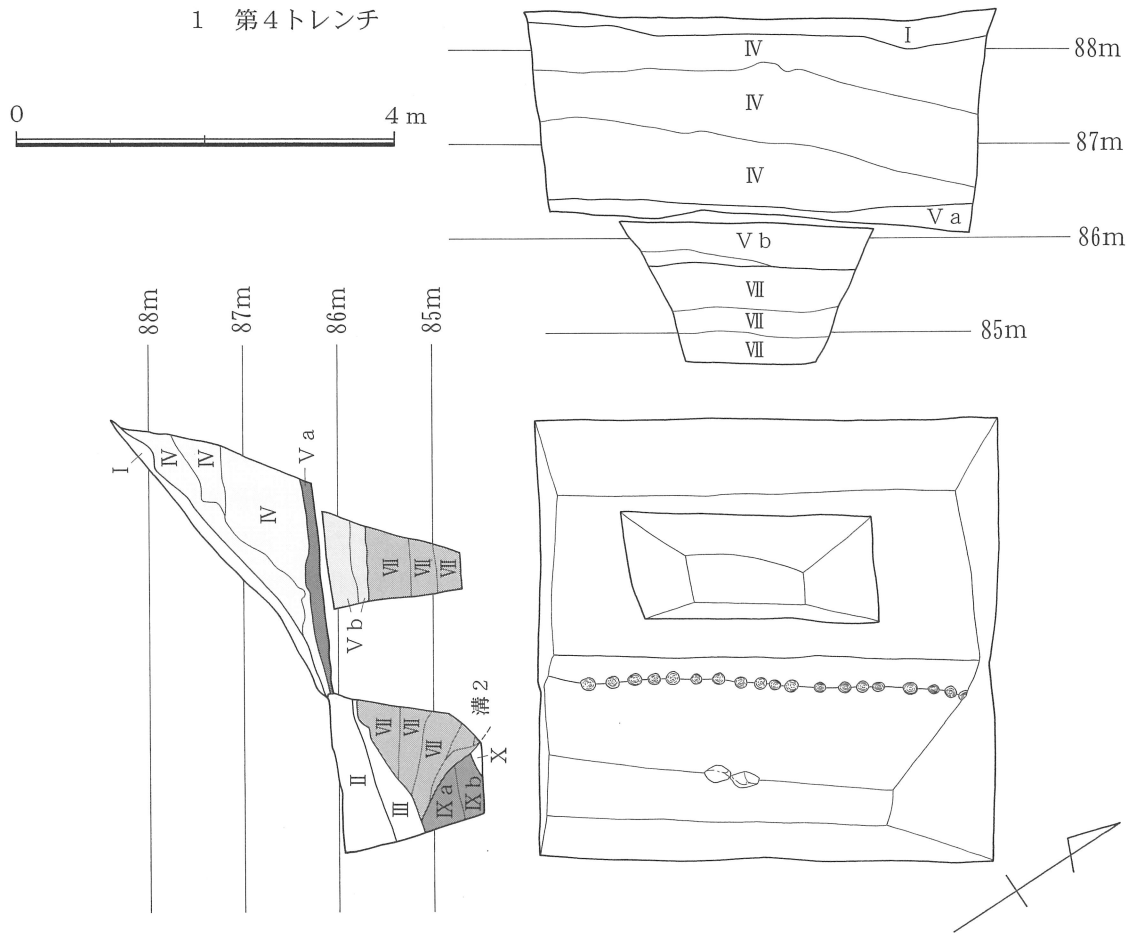


第4図 埴口丘陵 トレンチ平面図・断面図(2) (1/80) および石積遺構詳細図 (1/40)

II層が他のトレンチに比べて厚く認められた。しかも、断面を見る限り濠内に向かって落ち込んでいく状況が確認された。これは、直下に堆積しているIII層も同様である。III層の下にはVII層とIX層があり、断面図を見るとわかるようにIII層により切られているが、埴丘側に向かって下る溝2の掘り込みラインを確認できる。溝2自体はIX層とX層を掘り込んでいる。IX層はa層とb層が確認された。

本来であれば、さらに溝2の規模などを確認するために埴丘側に向かって掘り進めるところであるが、途中から湧水が激しくなり、ここまで掘り下げた時点で壁面の崩落が危惧されるに至った。土留めを行う必要が生じたため当該箇所の変更が困難な状態となった。そこで杭列の背後にサブトレンチを設定して、溝2の埴丘側における立ち上がりの確認を試みた。その結果、厚さ60cmほどのV層の下に溝2の埋土であるVII層が検出されたが、奥壁に近い位置でも立ち上がりのラインは確認できなかった。このような状況から、本トレンチにおける溝2の掘り込み面での幅は、4mを超えるものであった可能性が高いが、本来の埴丘裾が溝2によって削られているのか、さらに奥にあるのかは不明である。

遺物は、IV層での出土が全体に少ない。濠内堆積土(III層)では、陶磁器類の比率がやや高い様相をみせる。V層は埴輪の比率が高いが、陶磁器類も一定量含まれる。IX層では埴輪が多く出土した。また転落したと考えられる葺石も少なからず出土している。



第5図 埴口丘陵 トレンチ平面図・断面図(3) (1/80)

#### 第8トレンチ（第5図2）

北側くびれ部に長さ4m×幅5mの規模で設定した。Va層を検出した後、そのまま全体を掘り下げると第4トレンチの状況から濠側の壁面の維持が困難と考えられたため、大正期の護岸杭列を残しつつ、まず奥壁及び西壁に沿って幅1～1.5mの範囲を掘り下げた。西壁沿いを掘り上げた時点で、やはり濠側の壁面で崩落が始まったため、掘り下げ範囲の拡張は危険と判断し、一部土留めのうえ拡張を中止した。よって、平面的には逆L字状に掘り下げたにとどまり、範囲としては必ずしも十分ではないが、いずれも地山まで検出しており、土層断面からトレンチ全体の状況はおおむね把握できる。

トレンチ設定箇所付近は墳丘の傾斜も比較的緩やかであるため、他のトレンチに比べて盛土の規模は小さく、IV層の厚さは約1～1.5mである。その下にほぼ水平にV層が検出された。最上層は旧表土であるVa層である。検出範囲で見ると、厚さは1mに満たず、上面は大正期の護岸工事による浚渫で削られている。V層上面を検出中に護岸杭列を検出し、断面で大正期の浚渫に特徴的な杭列背後の段を確認した。V層は溝2の埋土であるⅦ層と地山であるX層の上に盛土されているが、溝2は西壁の土層断面において明瞭に認められ、東壁・南壁でも一部確認される。溝の幅はトレンチの幅より大きいため、濠側での立ち上がりは確認できていない。墳丘側では溝の法面下端が検出され、この法面と下端は現状の後円部に沿うように円弧を描く。しかし、Ⅸ層がまったく認められず、転落した葺石なども検出されないため、これが本来の後円部の形態や規模を反映しているとは言い難い。

遺物は、IV・V層において埴輪・陶磁器類が出土している。出土の比率は埴輪の方が高い。

#### (4) 後円部

##### 第5～7トレンチ（第6図1～3 図版5-1）

第5・7トレンチが長さ2m×幅2m、第6トレンチが長さ2.5m×幅2mの規模で、後円部に設定したトレンチである。後円部は、墳丘が急斜面であることに加えて裾部は崖状を呈しており、墳丘側にトレンチを延ばすことは極めて困難であった。また、地形的に後円部が低く、濠水がすべて後円部周辺に溜まるため、濠側に延ばすこともできなかった。そのため、この3箇所については他のトレンチより規模が小さくなっている。調査の結果、各トレンチとも同様の状況を示していたので、以下にまとめて記述を進めたい。

やや厚いI層の下にⅢ層が検出された。Ⅲ層の検出と共に大正期の杭列も確認された。Ⅲ層に特徴的な杭列背後の掘り込みが明確なのは第7トレンチのみである。第5・6トレンチは明確な掘り込みはないが、比較的急傾斜で濠側に落ち込んでいく。また、第6・7トレンチでは明らかに段が形成され、さらに深く掘り込まれている。このような状況から、V層はかなり削られているようであり、第7トレンチで明瞭である以外は認められないか、薄く残っているにすぎない。溝2の埋土であるⅦ層も、V層同様大幅に削られていると考えられるが、掘り込みラインが濠側に向かって下る点は前方部側と異なる様相として注意される。

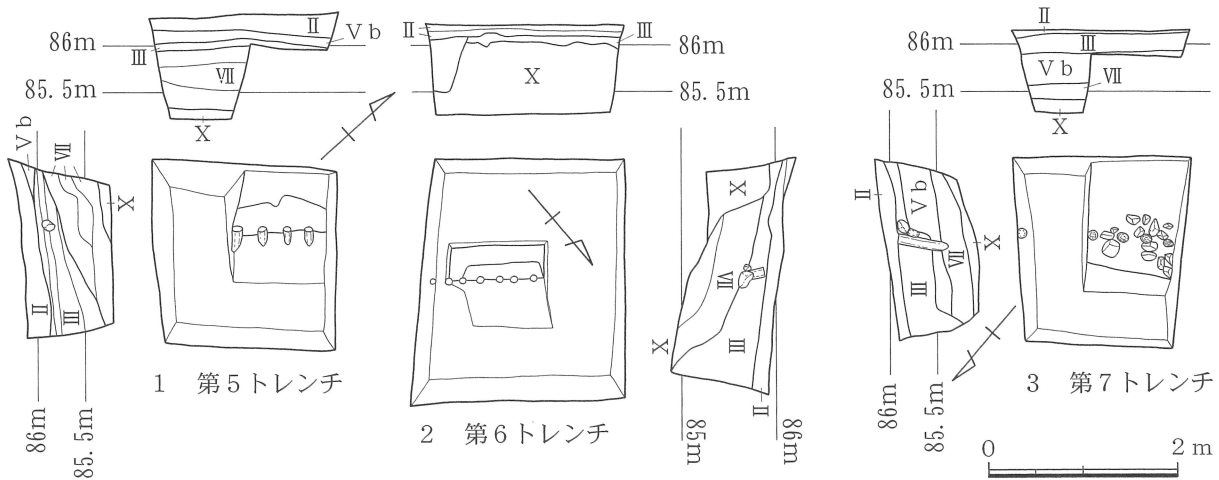
地山であるX層は、第5・7トレンチにおいて標高約85.3mで確認された。第6トレンチでは現状での溝2の立ち上がり上端が判明しており、少なくとも標高86m付近までは地山があったと考えられる。

遺物は、第5・6トレンチでの出土がトレンチの規模も小さいため少量にとどまる。埴輪の占める割合が高い。第6トレンチでは溝2埋土から瓦質播鉢の底部片(第19図98)や鬼瓦片(第19図101)などが出土した。第7トレンチでの出土量はそれほど多くはないが、古墳時代以外の土師器や陶磁器類の割合が高い点で、第5・6トレンチと異なる。V層から土師器の高坏脚部片(第17図79)などが出土した。

#### (5) 前方部北側面

##### 第9トレンチ（第7図 図版5-2・3）

前方部北側面に、長さ4m×幅5mの規模で設定した。現状で墳丘斜面は急傾斜で、裾部は崩落により崖状を呈している。土層は、厚さが10～20cm程度のI層の下にIV層が堆積している。IV層は第8トレンチ同様前方部南側面に比べてやや薄く、厚さは1.2～1.6mである。V層は他のトレンチと同様、本トレンチでもその上面はほぼ水平に検出されているが、濠内では大正期護岸工事による浚渫で削られている。本トレンチにおいてもV層上面付近で大正期の杭列を検出している。V層は約1mの厚さで盛土されているが、東壁の



第6図 埴口丘陵 トレンチ平面図・断面図(4) (1/80)

濠際では、削り込まれたような立ち上がりのラインが認められることから、それまでの地表面の上に単純に盛土されたのではなく、盛土前に何らかの改変が加えられた可能性がある。V層を除去するとVI・VII層とIX層が検出された。VII層の上に比較的薄くVII層がのる状況は第2トレンチのあり方に類似している。第7図の平面図に示したように、杭が2本検出されたが、列になるかどうかは不明である。溝1と溝2は並行しないが、杭の平面的な位置関係は溝1の上端ラインに沿っているように見える。

ところで、次に述べる第10トレンチと同じく、本トレンチではもっともIX層の状況が明確に把握できた。a層が植物遺体を大量に含む特徴的な土層であるため、VII層を埋土とする溝2の掘り込みのラインは容易に分層できた。またIX層の厚さは約90cmであるが、a層はもっとも厚く堆積しており、b・c層は全体に薄い。b層のうち転落した葺石は、IXc層直上で面的に検出された。IX層を除去すると地山を削った濠底面に到達するが、水平ではなく、濠側に向かって緩やかに下っていく。

遺物は、IV・V・IX層で出土量が多い。埴輪はどの層位からも出土するが、下位の層ほど出土量が増加する。逆に陶磁器類はIV層において顕著であるが、V層では激減する。VII層は、大半が埴輪で明確な陶磁器類が認められない。IX層では、埴輪以外に土師器の高坏脚部片(第17図75)も出土している。IX層出土の埴輪片は大きいものが多く、器面の状態も良好である。

#### (6) 前方部前面

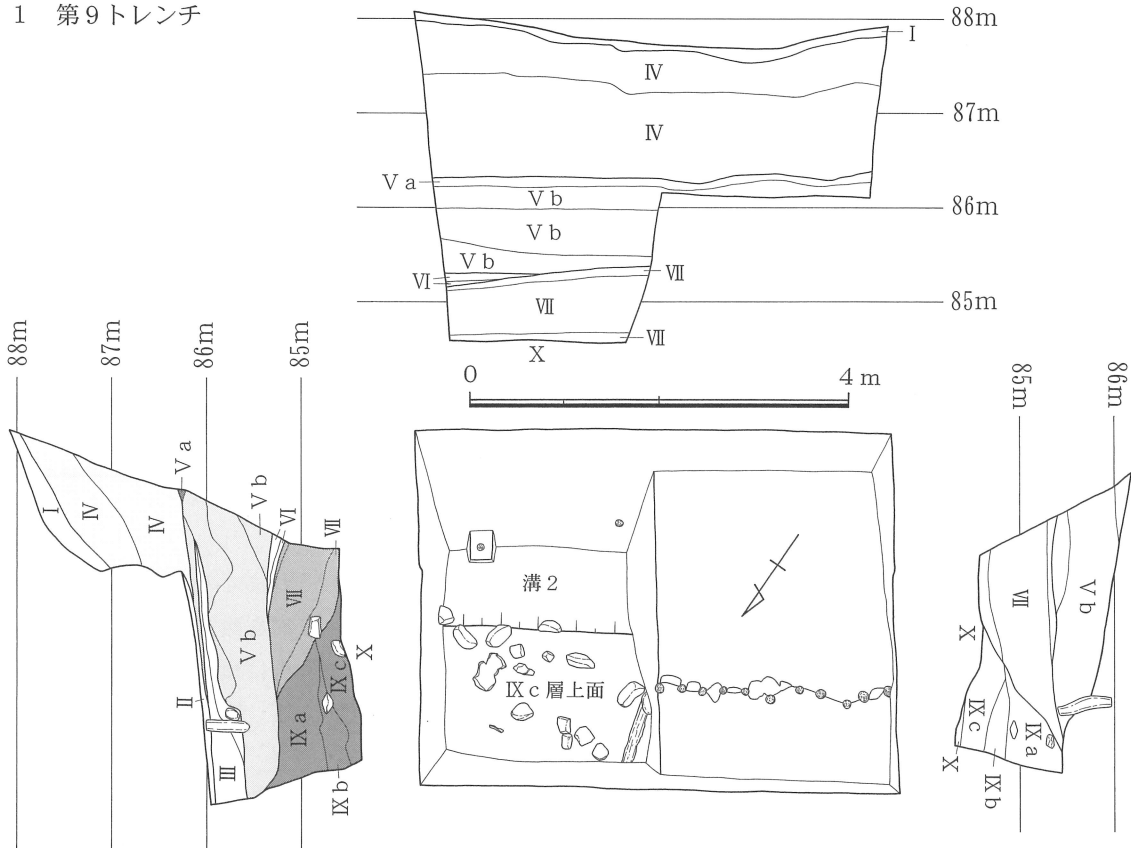
##### 第10トレンチ(第8図1 図版6、7-1)

前方部前面北側の隅に長さ5m×幅3.5mの規模で設定した。埴丘側は崖状を呈し、裾に沿って掘り下げたため、トレンチの平面形は不整形なL字形となっている。土層は、濠内の表土であるII層の下に、III層が形成されている。大正期護岸工事の杭列がきれいに検出され、その際の杭列背後からの浚渫も断面で明瞭に確認でき、比較的平らに鋤き取られていることもわかる。

なお、この大正期の浚渫を埴丘全体で見ると、断面を観察する限り、前方部北側面～前方部前面にあたる第8トレンチ～第1トレンチ間のIII層床面はなだらかであるが、前方部南側面から後円部にあたる第3トレンチ～第7トレンチ間では、深く掘り込まれていく状況が認められる。

III層を取り去ると、断面図の②・③面においてVII層が残存し、①・④面ではV層がわずかに認められる。そして、V層に隠れるようにVII層が辛うじて認められる。この溝2の掘り込み斜面は埴丘に向かって下っている。IX層は①～④面すべてで認められる。地形的に高くなっているため、検出面は比較的浅くなっており、現濠内堆積土上面から約40cmである。上面は濠側に向かって緩やかに下っている。IX層上面を確認していく過程で杭を1本検出したが、溝2の掘り込み上端付近にあたるので、それに伴うものであろう。IX層は層の細分・遺物の包含状況など第9トレンチと同様であるが、本トレンチのIXa層には倒木が含まれる点に特徴がある。外皮が残っており、明確な加工痕が認められないことから自然木と考えられる。3本確認でき、も

1 第9トレンチ



第7図 埴口丘陵 トレンチ平面図・断面図(5) (1/80)

とても大きな倒木1で、径が約30cmである。完全にIXa層内に収まっており、後から倒れ込んだのではなく、IXa層が形成される過程で埋没したと考えられる。

IX層を取り除くと築造当初の濠底面が一面に検出された。全体に北西方向に緩やかに下っている。この面では、遺構として断面図①・②面のコーナー付近で掘り込みの一部を検出した。性格は不明である。①面を見ると、IXc層を掘り込んでいることがわかるので、築造後さほど時期を隔てずして掘り込まれたと考えられる。埋土内からは埴輪細片2点と転落した葺石1点が検出された。

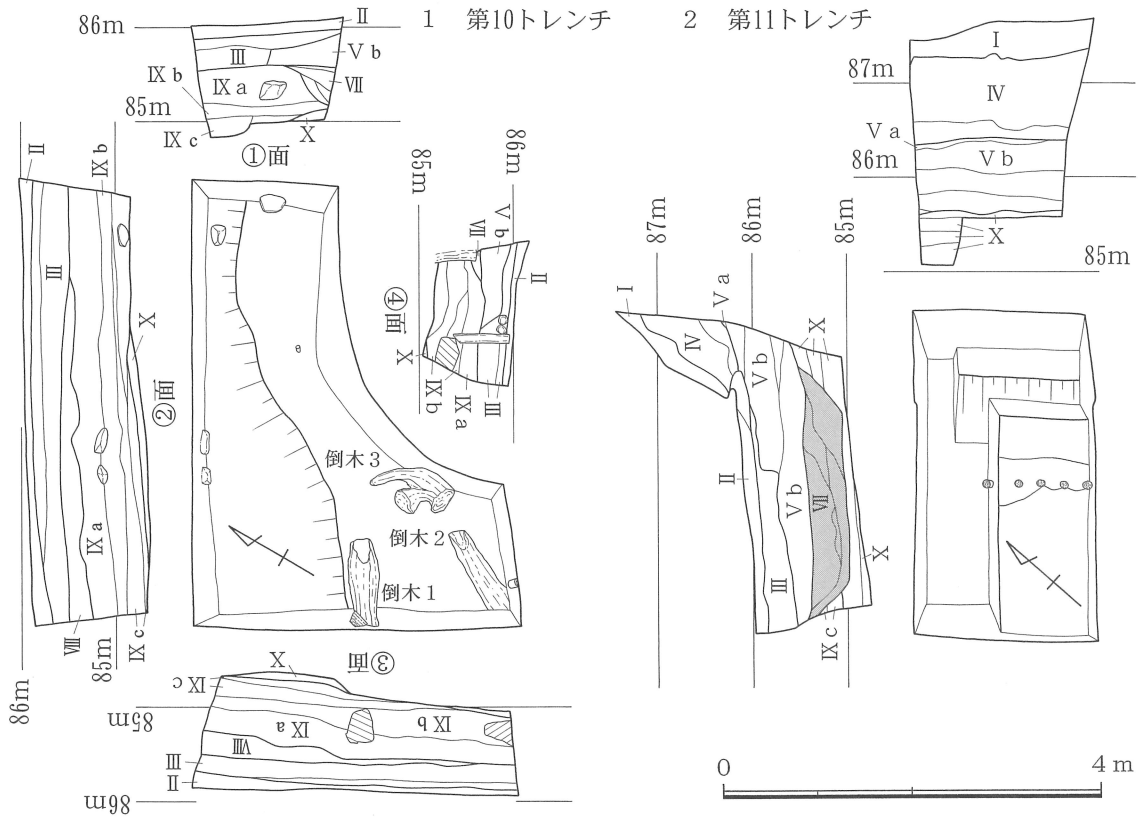
遺物は、トレンチが現濠内に位置するためIV層がない。そのためV層でわずかに陶磁器類が出土した以外は、出土遺物のすべてが埴輪・須恵器・土師器である。

第11トレンチ (第8図2 図版7-2)

前方部前面中央付近の埴丘主軸上に、長さ3.5m×幅2mの規模で設定した。埴丘側は急傾斜で立ち上がる。土層は、I層の下にIV層が認められ、奥壁において厚さ1mを測る。濠内は、やや厚めのII層の下にIII層が堆積する。II層を除去した段階で大正期の護岸杭列が検出された。V層は検出範囲で厚さ最大70cmを測る。Va層が途切れながらも認められるため、本来の盛土の厚さを残していると考えられる。V層の下では断面図からわかるとおり、溝2のほぼ全体を検出し、埴丘側でわずかにX層を検出した。溝2は全トレンチの中で、唯一断面形態が明らかになった。上面は削平されている可能性があるため本来の形態であると言い切れないが、床面は平らであり全体の断面は逆台形を呈する。現状で上端幅約2.7m、下端幅1.8m、深さ40cmを測る。溝2は地山であるX層と築造時の原初堆積土であるIX層を掘り込んでおり、濠側の壁のコーナー付近でごくわずかな範囲であるが、IXb・IXc層を確認した。

なお、IXc層下面の標高85.1m付近が築造時の濠底面であるが、埴丘側では50cm高い標高85.6m付近でも原初堆積土は認められない。このことは原初堆積土が溝2の範囲内で途切れていることを示していると考えられ、本来の埴丘裾が、まさにこの付近に存していたことを推定させるといえよう。

遺物は、埴輪を中心とするが、III・IV層において陶磁器類のほか灯明皿として使われたと考えられる土師



第8図 埴口丘陵 トレンチ平面図・断面図(6) (1/80)

器小皿が顕著である。V層は土師器が1点認められるが、他はすべて埴輪である。

(清喜裕二)

### 3 出土遺物

出土した遺物は、採集品も含めて1999点である。全体的には古墳時代の遺物が多く、埴輪が約67%、須恵器・土師器が約5%で、合わせて全体の70%以上を占める。その他は中近世の陶磁器類・瓦質土器や瓦で約27%を占める。また、ごくわずかではあるが、鉄製品や漆器なども出土している。

遺物が比較的多く出土した層は、古い順にIX層・VII層・V層・IV層である。層位ごとの出土傾向は、IX層で埴輪が多く出土し、VII層は他の層に比べると出土量自体が少ない。V層では埴輪片も多いが瓦質土器・陶磁器類の量が格段に増えている。IV層はさらに陶磁器類の比率が高まり、IX層を盛土したと考えられる第1・2・12トレンチなどを除けば、埴輪の量は激減する。

また、遺構に帰属する遺物は少なく、溝2(VII層)と第3トレンチに築かれた石積遺構(V層直上)からの出土遺物にとどまる。

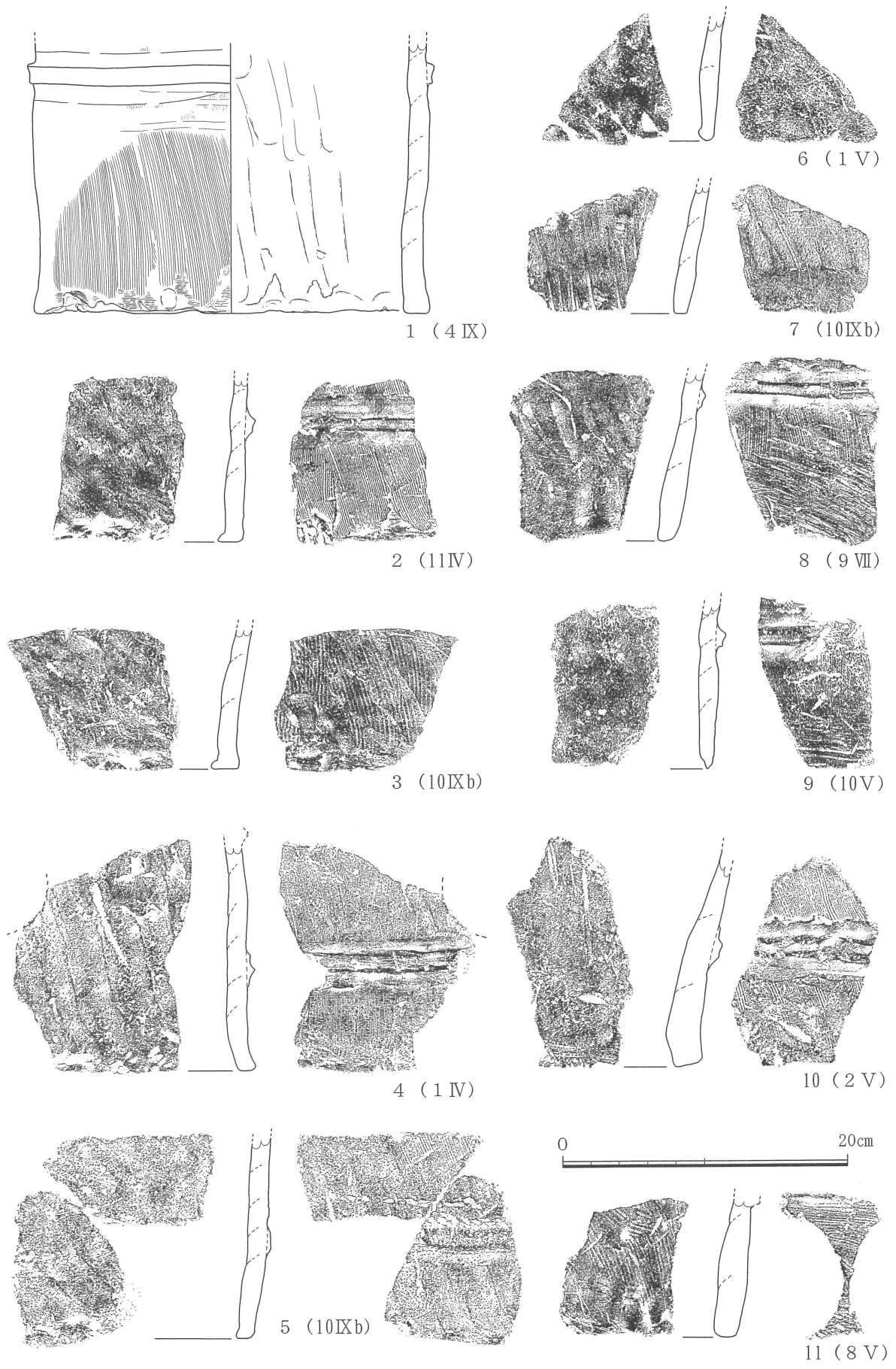
以下、個別に記述を進めるが、特に大半を占めるIV・V層出土遺物が盛土からの出土という関係上、新旧の遺物が混ざりあっている。よって、多くの遺物の中から各時代の特徴的なものを抽出しつつ、土層の年代を考える上で有効と考えられるものを中心に上げたい。

遺物の番号の横や下に括弧でアラビア数字とローマ数字を付しているが、アラビア数字がトレンチ番号、ローマ数字が出土層位を示す。

#### (1) 古墳時代の遺物

##### 埴輪

埴輪の大半は円筒埴輪であるが、朝顔形埴輪や器種の特定できない埴輪が若干存在する。埴輪はどのトレンチからも出土しているが、残りのよい資料は原初の堆積土(IX層)から出土する傾向にあるため、図化したものの多くはIX層の掘削をおこなった第4、9、10トレンチからの出土品となっている。また、今回の調査



第9図 埴口丘陵 出土品実測図 (1) 円筒埴輪底部 (1/4)

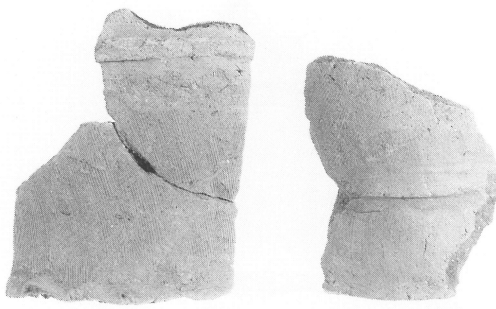


写真1 1, 4の外表面



写真2 5の外表面



写真3 7の外表面



写真4 8の外表面



写真5 9の外表面

成果と過去の調査成果を併せて考えれば、形象埴輪は墳丘側ではなく外堤側で出土する傾向にあるといえる。

出土した埴輪はいずれの資料にも黒斑がなく、窖窯焼成によるものと判断される。焼成の仕上りは、一般的な窖窯焼成埴輪の範疇のものが大半であるが、須恵質のものが少量存在する。

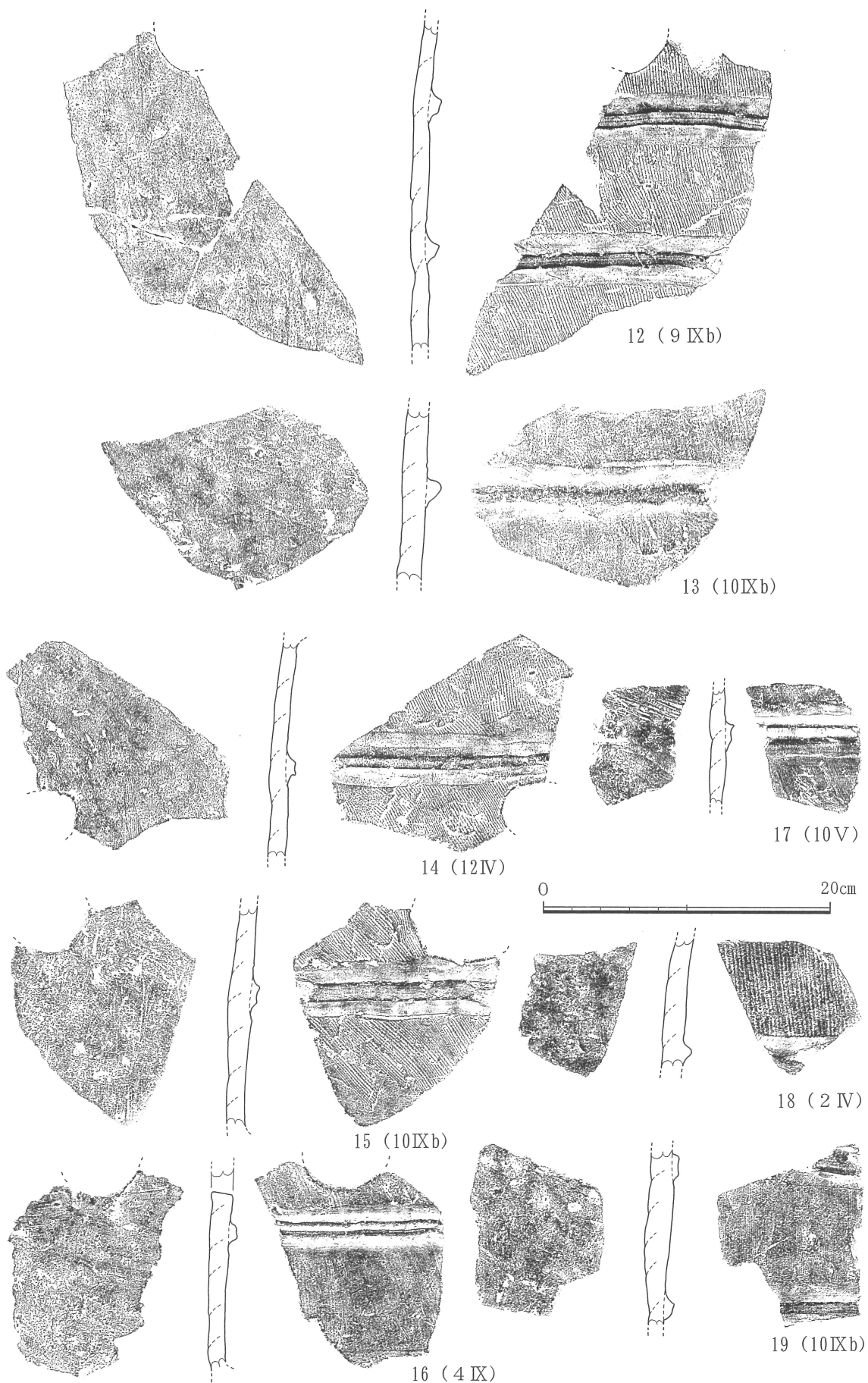
胎土は含まれる鉱物の組成からいくつかの傾向にわかれる。基本的には花崗岩に由来する直径1ミリほどの砂礫や金雲母を含むものが大半であるが(約8割)、これらに比べて金雲母を多く含むものや(8、10、16、20、25、43、44、46、51)、シャモットと呼ばれるような赤色粒を多く含むものが存在する(12、13、15、40、49)。ただし、こうした含有物の多寡は漸移的なようにもみえ、このような胎土の違いが埴輪のもつ他の要素と有意な関係があるのかどうかは不明である。なお、本陵出土の埴輪には藁のようなものが胎土中に含まれていた痕跡を確認できるものがいくつか存在する(13、17、18、22、25、33、37など)。意図的に混ぜたものなのかは判断できないが、注目される特徴として指摘しておく。

色調は基本的には黄褐色系のものが多く(約6割)、橙色系のもの(約3割)や須恵質で青灰色のもの(約1割)も存在する。なお、赤色顔料の塗布は現状ではほとんど確認できないが、ヒビの隙間などに残存していることが観察できる個体もあることから、当初は塗布されていたものと判断される。

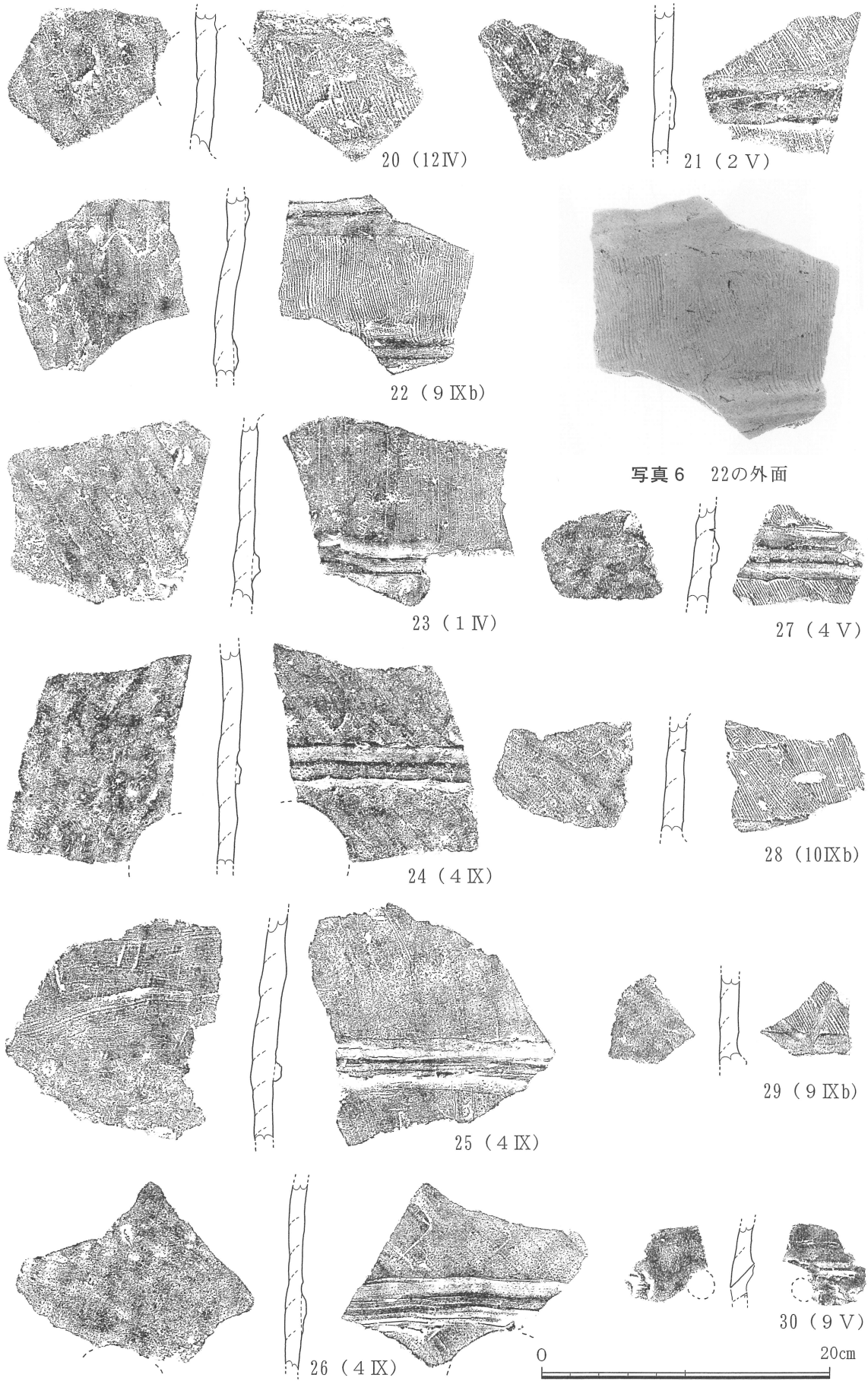
なお、透孔の形状は49が逆三角形となることを除いて、全て円形である。

円筒埴輪(第9～14図、図版8-1～3) 1～11は底部の破片である。第1段高は約8～17.5cmと多様であるが、8～10cm程度のものが大半である。1は底径が約27.5cm、第1段高が約17.5cmである。この個体のみ例外的に第1段高が非常に高くなっている。基部外面には横方向の木目の痕跡を観察できるが、これは基部粘土帯作成時についたものと思われる(写真1左)。5は第1段の調整が左上方向のナデのみで、第2段からハケがほどこされている。第2段下部では突帯に平行するように縄目の痕跡が確認できる(写真2)。円筒埴輪本体を縄で縛った痕跡と思われるが、意図は不明である。

6～11は底部調整がほどこされているものである。底部調整がみられる個体を意図的にピックアップしているため、図示した底部の半数が底部調整をもつものとなっているが、実際の割合はこれより少なくなる。



第10図 埴口丘陵 出土品実測図 (2) 円筒埴輪胴部 (1/4)



第11図 埴口丘陵 出土品実測図 (3) 円筒埴輪胴部 (1/4)

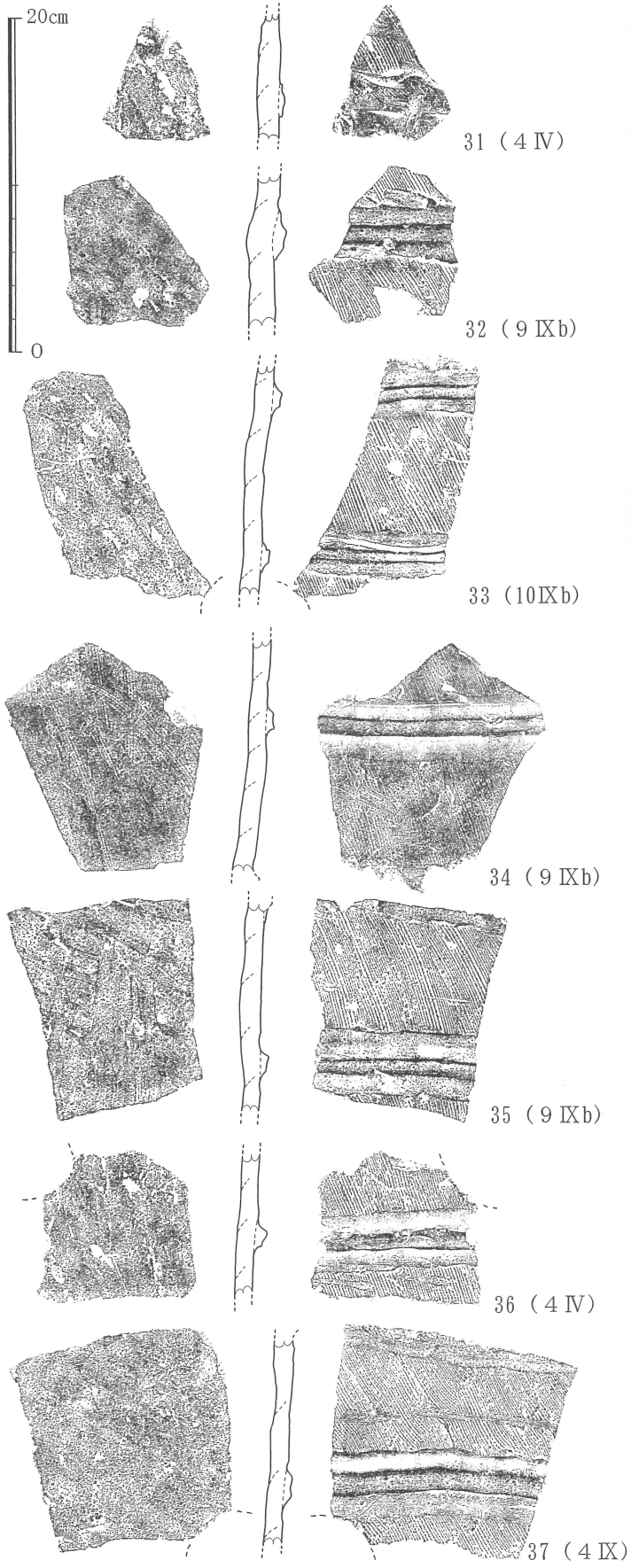


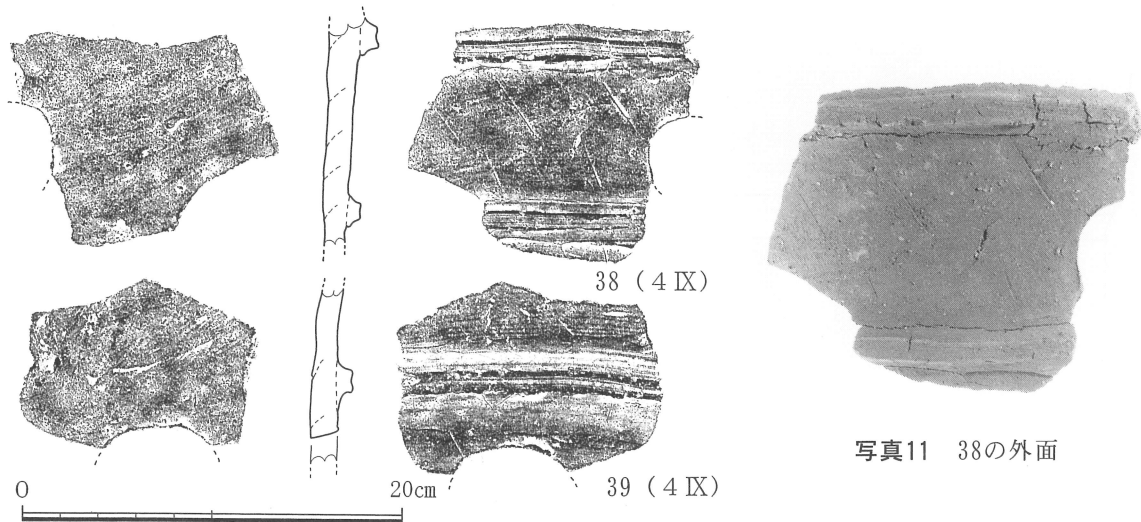
写真7 31の外面

写真8 32の外面

写真9 33の外面

写真10 37の外面

第12図 埴口丘陵 出土品実測図(4) 円筒埴輪胴部(1/4)



第13図 埴口丘陵 出土品実測図(5) 円筒埴輪胴部(1/4)

3割ほどであろうか。6は底面が水平ではなく波を打っていることから、ひずんだ底部に何らかの処置をほどこしていることがわかるものの、外面は摩滅しており目立った痕跡は確認できない。内面にはナデがほどこされている。7は底部の内面に板状工具で押さえた痕跡が確認できる。外面は指で押さえた痕跡であろうか(写真3)。8は外面に板状工具で押さえた痕跡<sup>(6)</sup>が確認でき(写真4)、内面にはそれと対応するような形で親指と思われる圧痕が確認できる。9も8と同様であるが、さらに底面が尖るほどになっているのが特徴である(写真5)。10は内面にケズリ調整がみられる。また、外面の一部にもケズリにみえる調整が確認できる。11は外面の残存状況がよくないが、おそらく横方向のハケ調整を志向しており底部調整も観察できる。

12～39は胴部の破片である。突帯間隔のわかる資料や類推可能な資料から判断して、突帯間隔はいずれも10cm前後でまとまっているようである。突帯形状にはさまざまなバリエーションが存在するが、突出度合いの差はあるものの、基本的には断面形状が台形になるものが大半であり、断面形状が三角形になるものはごく少数である。外面の調整方法は左上方向のハケ(もしくはまだハケ状の凹凸がつかない「板ナデ」と称されるもの)もしくはタテハケが多く、ヨコハケのものは数点しか確認できない。

12は現状での最上段に透孔があることから少なくとも3条4段以上の構成であったことがわかる。13は器壁が厚く、突帯の断面形状が三角形となるのが特徴である。15は外面の状況から判断して第2～3段の破片だと思われる。17は内面の上半部に左上方向のハケがみられることから、口縁部に近い破片だと思われる。21は扁平な突帯が特徴である。22は外面調整のタテハケが下の突帯部分にまでおよんでいることが特徴である(写真6)。27・28の外面には線刻がみられる。29は外面に指でほどこしたと思われるジグザグ状のナデがみられる。30は突帯付近に小孔が穿たれている<sup>(7)</sup>。

31～37は突帯の成形・整形にともなう可能性のある痕跡が確認できる資料である。31はいわゆる「断続ナデ技法B」<sup>(8)</sup>とされるものであるが、突帯の端面に木目が観察できることからそうした成形方法の前に「押圧技法」<sup>(9)</sup>とされる方法で突帯を圧着していたものと思われる(写真7)。ただし第何条突帯であったのかは不明である。32はいわゆる「断続ナデ技法A」<sup>(10)</sup>とされるものである(写真8)。33では下側の突帯の上辺に突帯設定にともなうL字痕にもみえるような痕跡が確認できる(写真9)。ただし、現状では本陵の出土埴輪で突帯設定の凹線は確認できていない。34・35は「押圧技法」となる可能性のある痕跡が確認できる資料である。36・37は意図の不明なナデが突帯の周囲にみられる(写真10)。

38・39はB種ヨコハケ(もしくはまだハケ状の凹凸がつかない「板ナデ」と称されるもの)のほどこされている資料である。静止痕がかなり傾いていることからB d種に分類されよう(写真11)。先にも述べたように、ヨコハケがほどこされた資料は今回の調査では数点しか確認されておらず、これは本陵における過去の調査成果とも齟齬をきたさない。なお、38、39はともに外面のヨコハケが拓本でみて右側に進行すること、内面

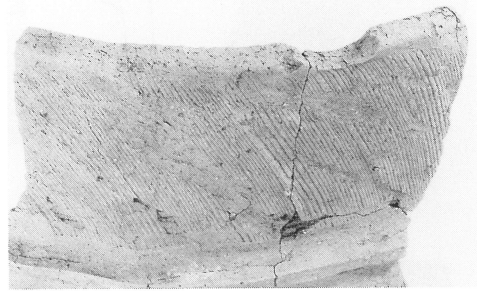
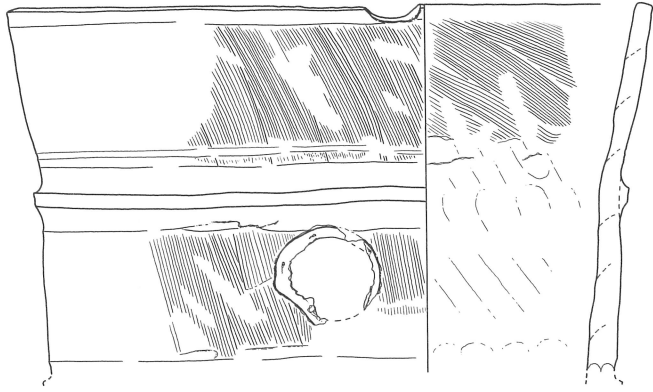
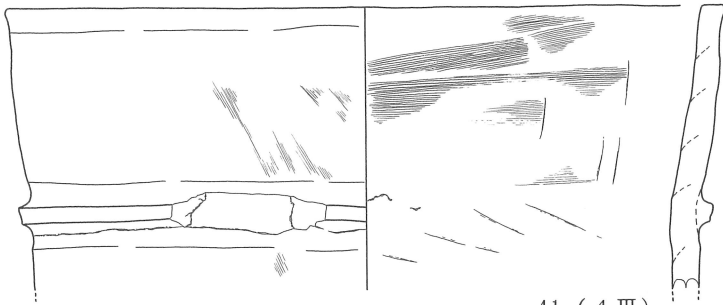
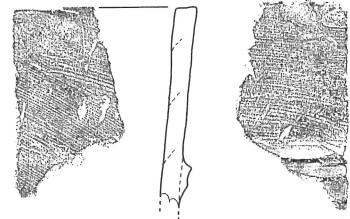


写真12 40の口縁端部

40 (9 IXb)



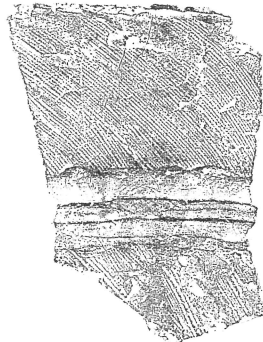
41 (4 III)



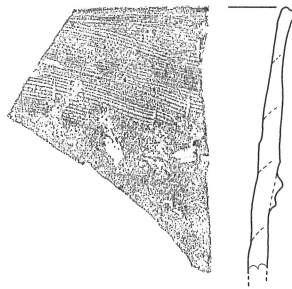
42 (10V)



43 (2 IV)



44 (12IV)



46 (1 III)



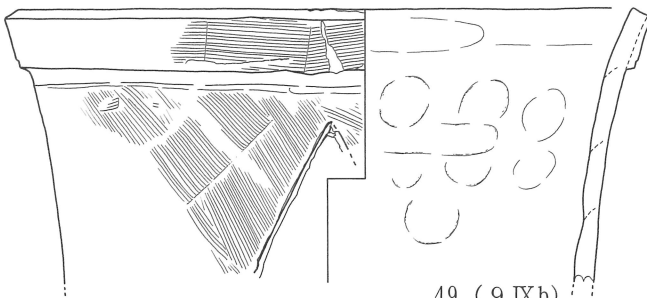
47 (8 III)



45 (9 IXb)



48 (9 VII)



49 (9 IXb)

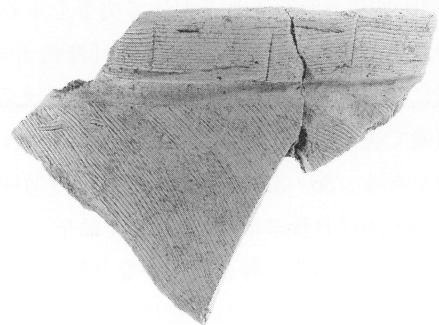
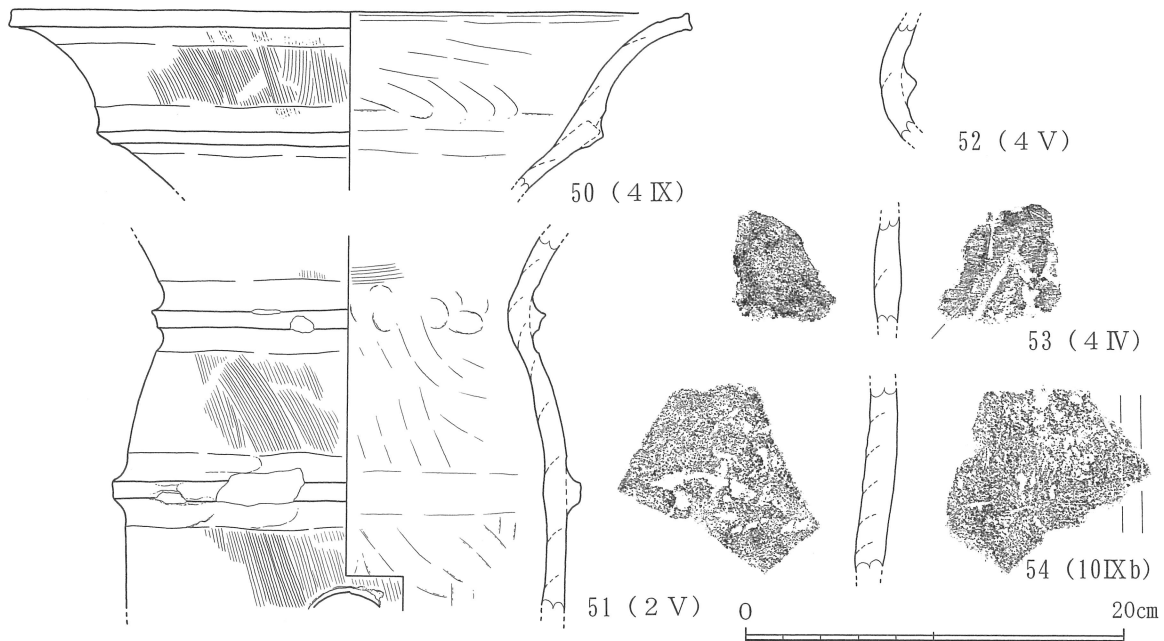


写真13 49の外表面

第14図 埴口丘陵 出土品実測図 (6) 円筒埴輪口縁部 (1/4)



第15図 埴口丘陵 出土品実測図(7) 朝顔形埴輪・不明埴輪(1/4)

調整が拓本でみて右上方向のナデとなっていることや突帯形状が類似することなどから、同一製作者(左利きか)によるものとなる可能性がある。

40～49は口縁部の破片である。口縁部高は計測可能なもので約8.5～10.5cmとほぼまとまるが、49については15cm以上になるものと推測される。口径についてはややばらつきがあるものの、それほど大きな差となるほどではない。口縁部の形態は大まかにみて、貼付口縁となるもの(48・49)とそうでないものに大別できる。48・49はしっかりとした貼付口縁であるが、以前の調査ではナデつけたままのような簡略化した貼付口縁も確認されている<sup>(11)</sup>。貼付口縁とならない口縁部の形態はおおむね直立する傾向にあるが、外面にヨコハケがほどこされる47については口縁端部を外側に屈曲させており中期的な印象をうける。40は口径約32.5cmである。最大の特徴は口縁端部に「U」字形のえぐりがみられることである(写真12)。これがどのような意図でなされたものかは不明であるが、奈良県三宅町所在の石見遺跡出土円筒埴輪などの口縁部外面にみられるような「U」字形の線刻<sup>(12)</sup>や小穿孔といわれるものとの関係があるのかもしれない。49は貼付口縁をなす粘土帯上に静止痕をもつヨコハケをほどこし<sup>(13)</sup>、最上段に逆三角形の透孔をもつことから、特異な印象をうける資料である。こうした古い要素は出現頻度はべつにして連綿と受けつがれるものとみるべきなのかもしれない。

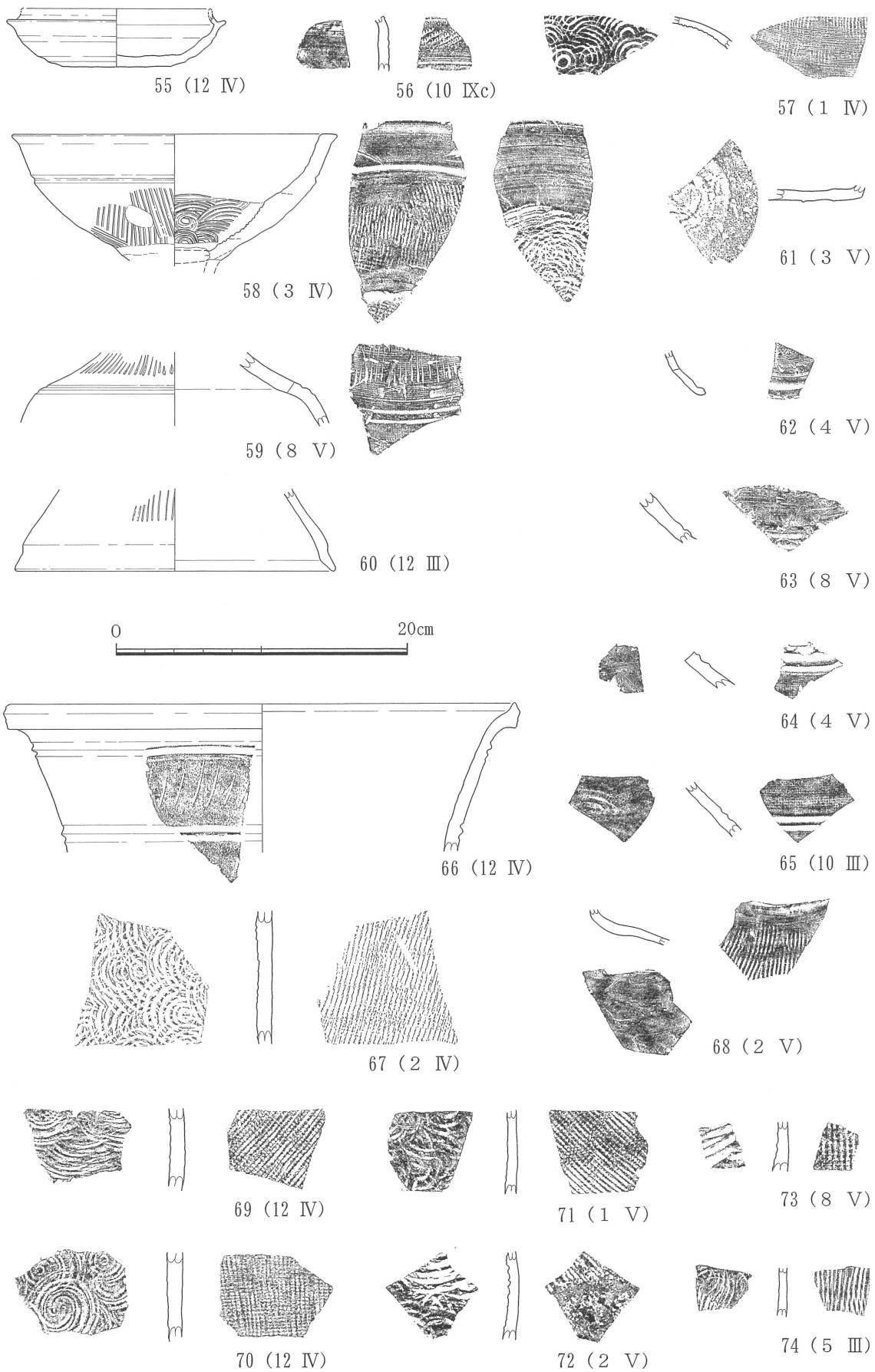
**朝顔形埴輪**(第15図) 50～52は朝顔形埴輪の破片である。50は口縁部の破片で、口径約36cmである。1次口縁と2次口縁の接合部分が剥離しており、接合方法が良好に観察できる。51は肩部付近の破片で、円筒部の直径は約23cmとなっている。52は頸部の破片である。頸部突帯の断面形が三角形となり、51とは異なっている。

**不明埴輪**(第15図、図版8-4) 53・54は線刻をもつ破片で、単純にヘラ記号であるのか形象埴輪などの文様となるのかが不明であるのでここでは不明埴輪とした。54は2本の線刻が平行してみられる。

#### 小 結

ここで本陵出土埴輪について簡単にまとめておきたい。

今回の調査では埴丘側にトレンチを設定したわけであるが、形象埴輪と確実にいえるものは皆無であり、形象埴輪は埴丘側ではなく外堤側で出土する傾向にあるといえる。本陵の円筒埴輪で全形が判明するものはないが、3条4段以上の構成のものが存在していたことは確実である。外面調整はナナメハケ、タテハケを基本とし、ごくわずかにB d種ヨコハケがみられる。最下段には底部調整のほどこされるものがあり、その方法は多様である。また、突帯の貼付方法として「断続ナデ技法A」「断続ナデ技法B」「押圧技法」もわず



第16図 埴口丘陵 出土品実測図 (8) 須恵器 (1/4)

かながらみられる。本陵出土の円筒埴輪に類似する資料は石見遺跡などに存在するが、「断続ナデ技法B」の出現頻度は石見遺跡に比べてかなり低い。「断続ナデ技法B」の出現頻度の高さを新しい要素とみるならば、本陵出土の円筒埴輪群は石見遺跡に比べて古い様相を呈しているといえるかもしれない。石見遺跡出土の埴輪は、須恵器でいえばMT15型式段階に位置づけられることから、本陵の埴輪はそれより若干古くみてTK47～MT15型式段階に位置づけられようか。

本陵は墳長83mの大型前方後円墳であり、当該期における大型墳の様相をうかがい知ることのできる貴重な資料といえる。また、奈良盆地内における円筒埴輪の系譜関係を読み解き、埴輪生産の展開を考えるうえで重要な資料といえよう。(加藤一郎)

#### 須恵器(第16図、図版8-5)

須恵器は、全部で43点出土している。器種は、杯身・蓋・器台・壺(甗か)・高杯・甕を確認している。大半が細片であり、全形を知りうるものはない。破片の多くは甕体部の破片である。また、古墳時代のものが大半と考えられるが、多くが細片であるため、帰属する時代を古墳時代として確定するのが難しいものもある。ここでは便宜的に、明らかに古代のものを除いたすべてを一括して扱う。

なお、古墳時代の遺物とはいえ盛土出土が多く、すべてが築造時に伴うものではないと考えられる。

55は杯身で口縁端部を欠くが全体の形態は把握できる。TK10～TK43型式に該当するようである。56・57は壺の破片で、56は甗の可能性もある。58(図版9-5)～60は器台の破片と考えられるが、59・60は壺の脚部の可能性もある。61～65は高杯の杯部や脚と考えられる破片である。66～74は甕の破片である。66は比較的大きな口縁の破片で浅くヘラ描文が確認できる。67～74は肩～胴部にかけての破片である。外面は平行叩き目か平行叩き目を交差させて格子目状の痕跡を残すものが多く、内面は一部磨り消したものの(68)もあるが、大半は同心円文の当具痕を確認できる。

#### 土師器(第17図)

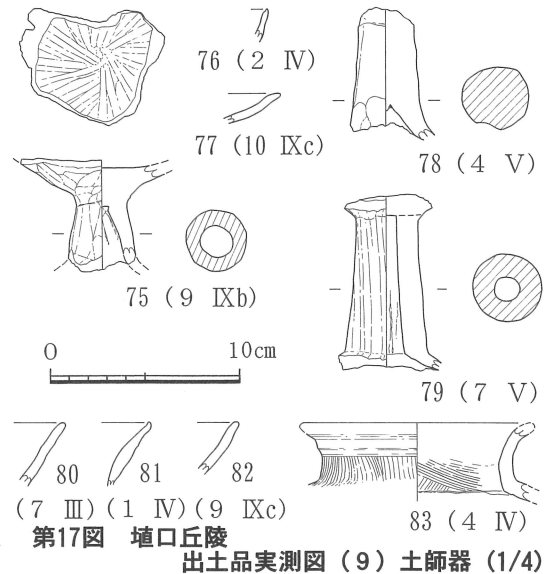
須恵器同様細片が多いができる限り図化して掲載した。高杯や甕の破片が多い。75は高杯で口縁部と脚端部を欠くがIXb層出土であり、築造時に伴うものである可能性が高い。76・77は杯または高杯口縁部の破片であるが細片である。78・79は高杯脚部の破片である。78は全体に摩滅が激しく調整などは不明である。脚内部は中実である。79は杯部と脚端部が失われており、脚だけが棒状に残存するのみである。80～83は甕の口縁部である。83のみ肩部への屈曲がわずかに認められる。

#### (2) 古代の遺物(第18図)

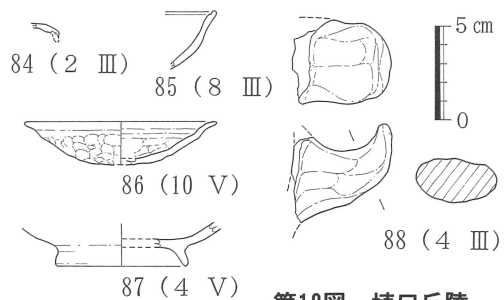
古代の遺物はわずかに出土したのみである。須恵器・土師器を一括して記述する。84は細片であるが蓋の口縁部であることがわかる。端部を欠く。飛鳥時代後半～奈良時代のものであろうか。85～87は杯の破片である。85は口縁端部内側にわずかな段がつく。86は指オサエが顕著で、口縁端部がいったん上方に屈曲したのち外反する。87は高台付の個体で内面黒色である。86・87は平安時代に帰属するものである。88は甗か甕の把手であろう。

#### (3) 中世の遺物(第19図、図版8-6)

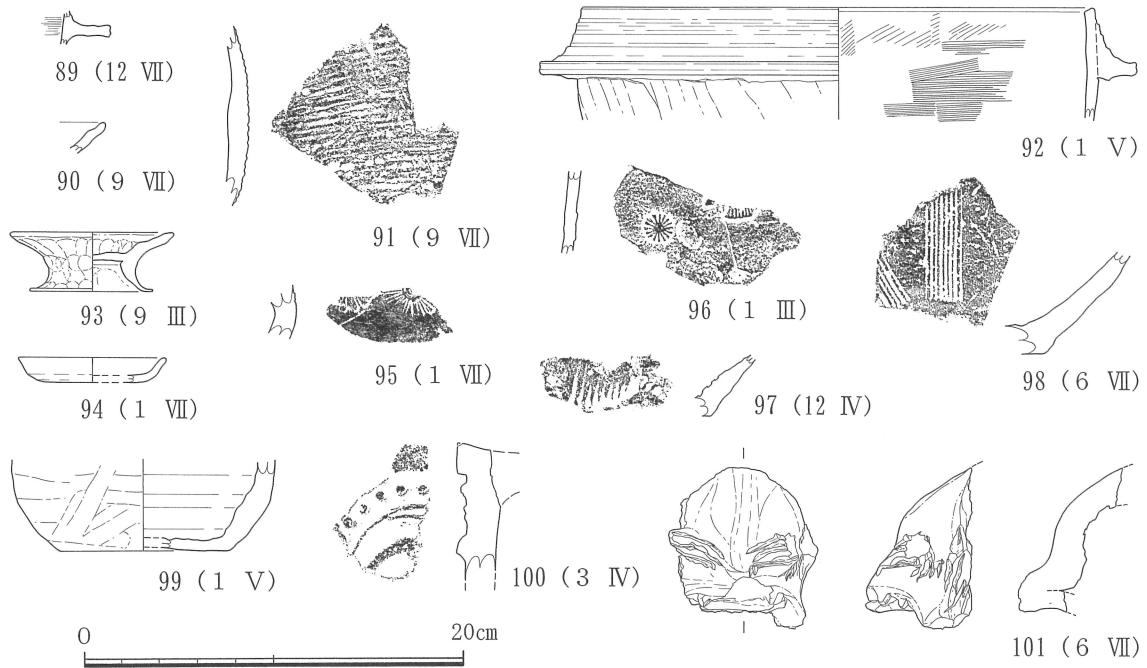
中世遺物として挙げ得るものの割合は、全体の出土量からすると比較的少なく、破片も小さいものが多い。よって、出土器種の数量的な傾向などは示し得ない。



第17図 埴口丘陵  
出土品実測図(9) 土師器(1/4)



第18図 埴口丘陵  
出土品実測図(10) 古代の遺物(1/4)



第19図 埴口丘陵 出土品実測図 (11) 中世の遺物 (1/4)

**土師器** 89は第12トレンチの溝2 (VII層)床面直上から出土した土釜の破片である。鋳付近のみ残存しており全形を知り得ないが、その特徴から菅原正明氏の分類による大和H型に該当する<sup>(14)</sup>。13～14世紀代と考えられる。90も溝2出土の杯の口縁部である。91は甕体部と考えられる破片で、刻みの単位が大きい平行叩き痕が特徴である。細かい時期は不明である。92は和泉地域の羽釜と考えられる。93は高台付皿である。端部の多くを欠くが全形を知りうる資料である。指頭圧痕が顕著である。中世後期であろうか。

**瓦質土器** 瓦質土器としては浅鉢形・土管形・播鉢・皿が確認された。94は皿、95は第1トレンチの溝2で出土した浅鉢形土器片で火鉢であろう。細片ではあるが径3cmを測る菊花文の大形単体スタンプが確認できる。15世紀代の製品と考えられる。96も浅鉢形土器片で、径1.5cmの菊花文単体スタンプが確認できる。97・98は播鉢で、底部のごく一部が残るのみで口縁部の形態などは知ることができない。97は細片であるため細かい時期比定は困難だが、98は15世紀代と考えられる。

**陶器** 陶器はほとんど認められない。99は徳利の底部で、備前産と考えられる。

**瓦** 100は軒丸瓦である。左巻きの三巴文である。珠点の間隔が狭く、巴文様の尾は長い。室町期と考えられる。101は鬼瓦の一部と考えられる破片である。顔が本体から剥離した状況で残存しているが、下顎部分は失われている。上顎部には歯(牙)と舌と考えられる部位が認められる。目は深いヘラ描きによって表現されている。中世の製品と考えられるが細かい時期を特定するには至らない。

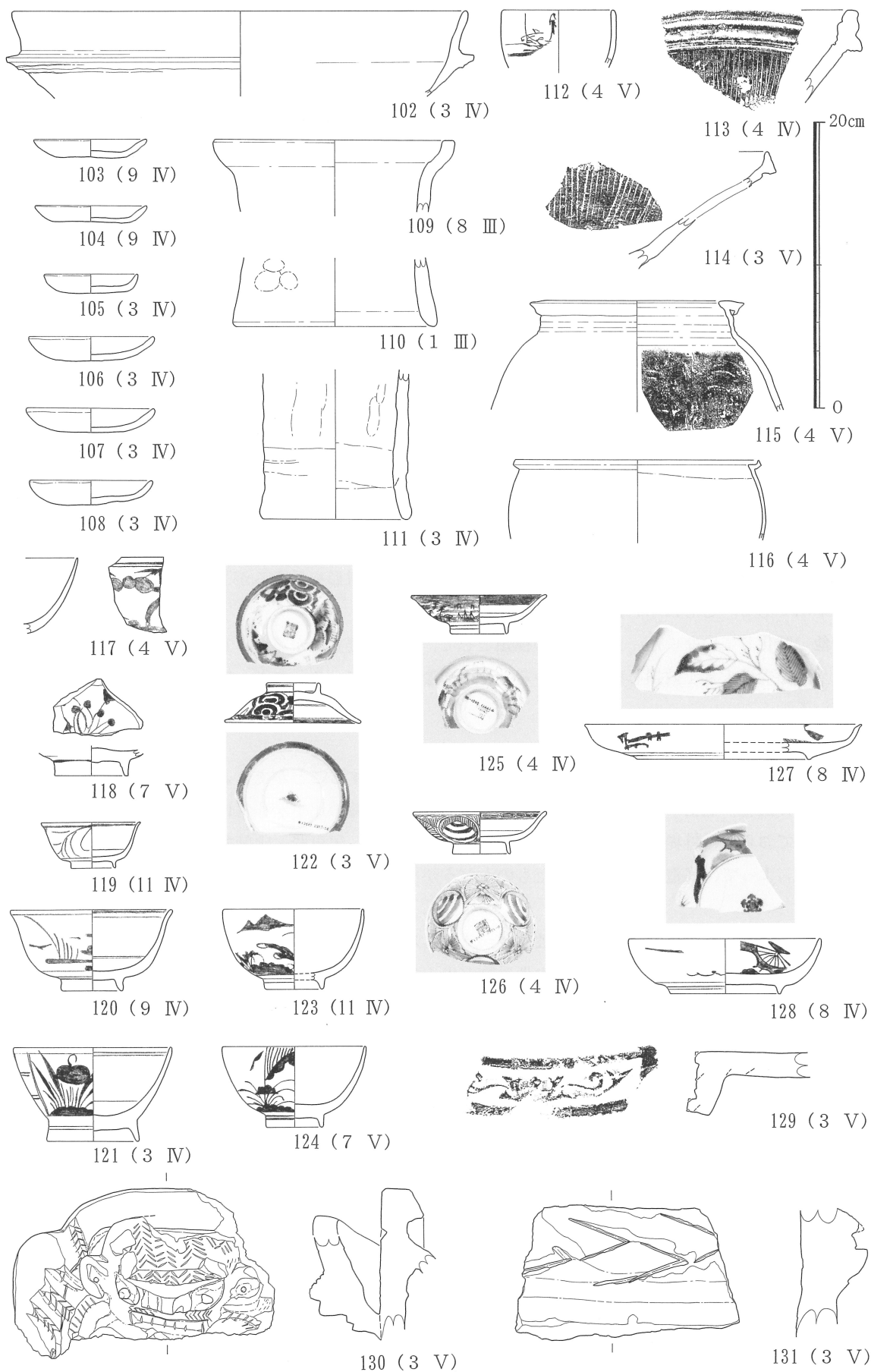
#### (4) 近世の遺物(第20・21図、図版8-7・8)

器種は碗や皿などの食器、播鉢・土鍋・焙烙などの調理器具などが比較的多く、そのほか灯明皿や受付皿などの照明具も目に付く。一方、壺や甕などの容器類はほとんど認められない。そのほか、化粧用具かと思われる猪口や土製人形なども認められるが、僅少である。

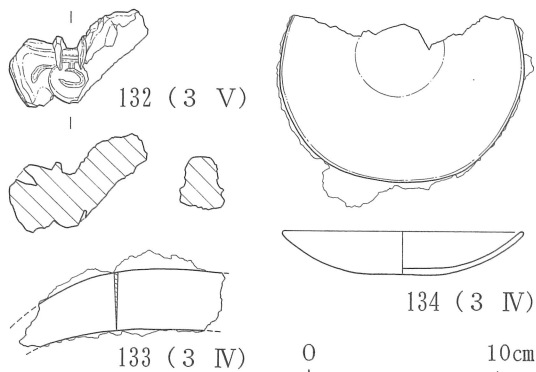
**土師器** 102は焙烙である。103～108は皿で、ほとんどの個体で口縁部に煤の付着が認められる。灯明皿として使用されていたと考えられる。口縁部が緩やかに立ち上がり端部は丸く仕上げられているものが多いが、103・104のように屈曲して立ち上がるものもある。

**瓦質土器** 109～111は土管形の口縁部・底部である。109・110は軟質であるが、111は硬質で焼き締まっている。近世の中でも比較的古い時期のものであろう。

**陶磁器** 大半は磁器で占められるが、陶器も一定量認められる。112は京焼風陶器碗である。113は堺播鉢である。114の播鉢は器壁が薄くやや小形の製品と考えられる。底部付近の卸目は使用のためすり減って滑



第20図 埴口丘陵 出土品実測図 (12) 近世の遺物 (1) (1/4)



第21図 埴口丘陵  
出土品実測図 (13) 近世の遺物 (2) (1/4)

らかになっている。115は甕と考えられる。内面にかすかに同心円当具痕が認められる。116は行平鍋である。117・118は漳州窯系の磁器碗である(図版8-7)。17世紀初頭～前葉と考えられる資料であり、今回の調査で確認された近世遺物の中ではもっとも古いもののひとつである。119～126は肥前を中心とした磁器碗で、119・120・125・126は端反碗、121は広東碗である。また、122は瀬戸産磁器の端反碗蓋である。今回の調査では瀬戸産の陶磁器はほとんど確認されていない。123・124は18世紀代と考えられる磁器碗である。127・128は皿で、127は18世紀代、128が19世紀代に下ると考えられる。

**瓦**(図版8-8) 瓦片の大半は近世のものと考えられ、棧瓦も散見される。破片そのものは各トレンチから出土しているが小さいものが多い。そのため、比較的全体のわかる第3トレンチ石積遺構のものを挙げておきたい。軒平瓦・道具瓦などが出土している。129は軒平瓦で、瓦当文様には飾橋が認められ、脇区幅が狭い特徴がある。19世紀代の製品と考えられる。130は鬼瓦である。131は肥厚した部分に矢羽根状の刻みが施されており、道具瓦の一部と考えられるが、どの様に復元されるかは不明である。

**土人形** 132は馬形の土人形で1点だけ出土している。鞍や鎧など細かい表現が施されている。

**鉄製品** 133は鎌である。基部と刃先を破損している。134は皿形を呈するが、どのように使用されていたのかは不明である。ともに厚い錆に覆われている。

**その他** 図化していないが、上記以外の種類として、漆器の腰丸椀が第3トレンチのIV層で1点出土している。土圧を受け大きく破損し変形している。全面赤漆を塗っている。また、寛永通宝3点が埴丘上で採集されている。

#### (5) 出土遺物の傾向

以上、主なものを提示したに留まるが、大まかな傾向は指摘することができよう。

**古墳時代の遺物** 埴輪が大半を占めるが、その中でも円筒埴輪の比率が非常に高い。また、明確な形象埴輪が出土しておらず、外堤側の調査結果と比べて対照的である。須恵器・土師器の破片も認められているが、細片が多い。よって、築造時に伴っていたものかどうかなど、具体的な部分については不明瞭な点が少なくない。

**古代の遺物** 非常に数が少なく、かつ破片ばかりである。

**中世の遺物** VII層より上位の層からは中世遺物が出土しているが、全体に出土量が少ない。確実に溝2の埋土中から検出された遺物の年代は中世までに限られており、近世遺物を含んでいない。

**近世の遺物** 17世紀初頭～19世紀後半まで万遍なく出土するが、全体として17世紀代代ものは少なめである。近世遺物の出土する土層はV・IV層を中心とするが、ともに18～19世紀代の遺物を多く含む一方で、近代以降の遺物を含まない。また、行平鍋(116)や広東碗(121)は18世紀末以降に出現するものであり、焼き継ぎを施した磁器の存在とも併せて、土層の年代を考える上で有効である。また、端反碗も指標として有効で、特に瀬戸産磁器端反碗の蓋(122)は確実に19世紀代であり、これがV層から出土していることで形成時期の上限を押さえることができよう。(清喜裕二)

## 4 埴丘の所見

今回、初めて埴丘裾にトレンチを設定したことで、本陵築造以降現在に至るまでの変遷がある程度明らかになった。トレンチの個別の状況は既に述べたとおりであるが、ここでは、埴丘の現況、各トレンチで確認された土層の形成過程や遺構・出土遺物から、埴丘の変遷過程を考えてみたい。

## (1) 「文久山陵図」と測量図・調査所見の比較

まず、墳丘の現況と「文久山陵図」を比較して、墳丘の外観について明らかにしたい。「文久山陵図」荒蕪(以下、「荒蕪図」、成功の場合は「成功図」と呼称)には「八幡宮」が描かれている。

第22図1と「荒蕪図」(同図2)を比較していきいたい。今回、等高線20cm間隔で測量図を作成したことと、現地の観察も踏まえたことで、墳丘上に平坦面が3面(平坦面①～③)形成されていることが、より明確に読みとれるようになった。第22図1をみると、前方部2段目の平坦面が、長さ約40m×幅約20mの長方形の壇として整えられていることがわかる(平坦面①)。しかも、墳丘の主軸や形態とは無関係で、東西南北に各縁辺が沿うように方位を意識して改変が行われているようである。さらにその南側の前方部1段目に平坦面②が、1段目の斜面上に平坦面③が造成されている。平坦面③上面は現状では標高88m前後であるが、第12トレンチで述べたとおり、IV層が盛土された結果である。「八幡宮」が墳丘上にあった期間の地表面と考えられるV層上面(Va)は、標高86.5m前後と考えられ、現状より1.5m程度は低かったと考えられる。平坦面は①から③に向かって順次南に展開しているが、社殿が建てられた平坦面①が墳丘の中央ではなく、北西角が平坦面②からはみ出るかのように位置している。

ただし、基本的に現状の墳丘はIV層によって形成されているため、現状が「八幡宮」造営時の平坦面(特に平坦面②・③)を正確に留めていない箇所もあろう。

しかし、多少の改変はあっても「荒蕪図」に描かれている建物は、これら平坦面上に建てられていたと考えられる。また、平坦面①の土壇は西面のみ緩傾斜であり、平坦面①・②を結ぶ通路(通路①)としてここが使われていたことを示している。さらに、現在墳丘への登り口となっている前方部前面西側隅周辺は傾斜も比較的緩やかで一定の幅をもっており、位置的にも通路①の延長線上にあたる(通路②)。よって、平坦面①と通路①・②は直線的に結ばれる位置関係にあると考えられる。

このことから、社殿や参道は西面していたと考えられ、「八幡宮」の造営にあたり、その当時の墳丘の形態・規模など限られた面積を最大限に利用しつつ、方位も含めて計画的に平坦面の位置を決め、基本的には墳丘をまったく新しく造り変えたと考えられよう。よって、現墳丘の段築が本来の状態を反映している可能性は極めて低いといえる。

次に上記の所見と「荒蕪図」を比較すると、「荒蕪図」に描かれた建物の位置関係から測量図における平坦面との位置関係が推定できよう。「荒蕪図」では、建物が描かれている高さの違いから、平坦面①には社殿が描かれ、平坦面②には鳥居や付随する建物が描かれていると判断できる。平坦面③については、明確な建物の描写はないようである。さらに、参道・鳥居・社殿までが直線的に配置されている様子が把握でき、この状況に合致するのは、平坦面①～通路①～通路②である。

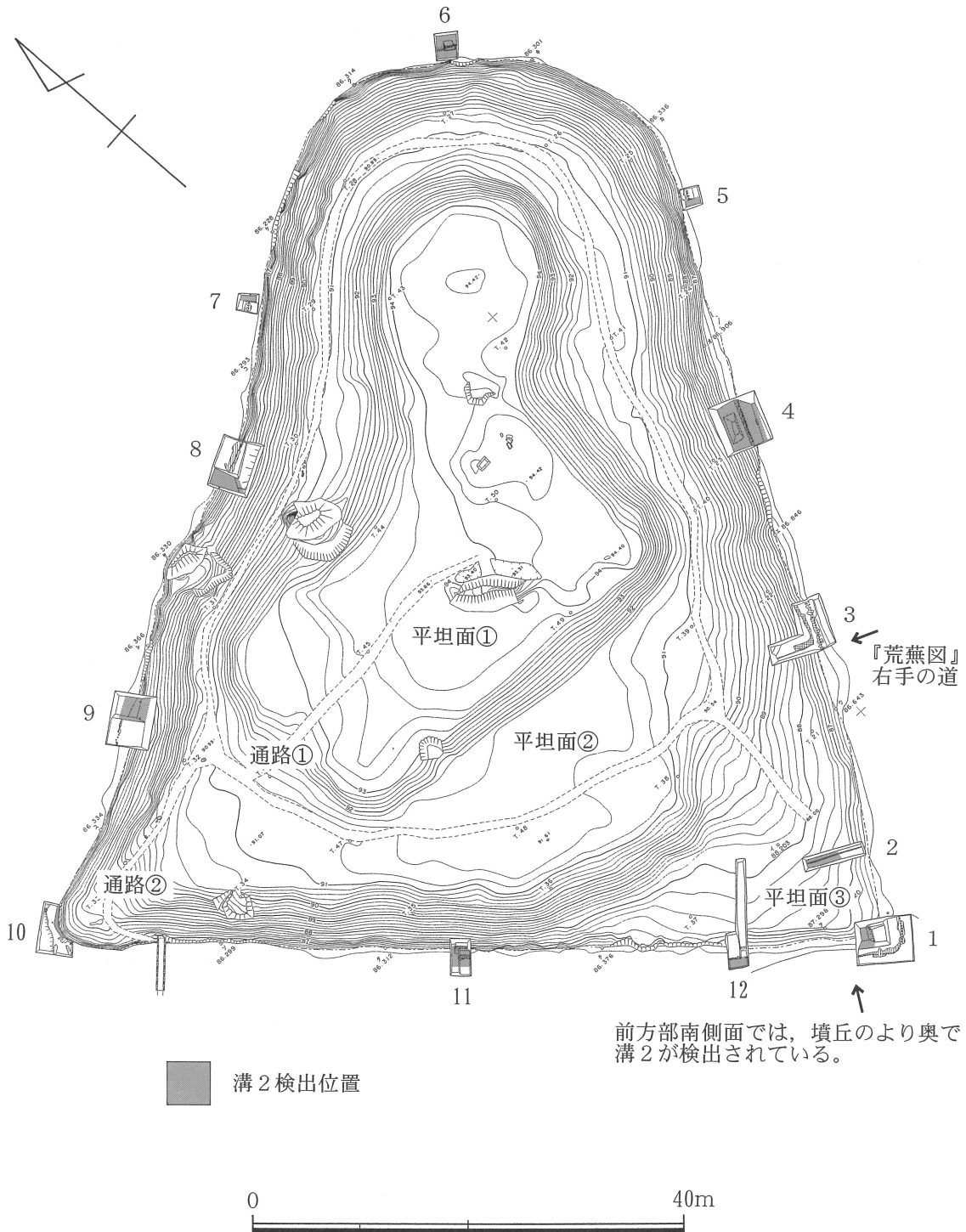
ところで、「荒蕪図」には墳丘(「八幡宮」)に至る道がふたつ描かれているが、左手に描かれた社殿や鳥居に向かって延びる道は、墳丘測量図の位置関係からすると通路②であり、前方部前面西側隅に該当すると考えられるが、「荒蕪図」(第22図2、図版1-2)を見る限りコーナー部分に描かれているようには見えず、判然としない。しかし、「成功図」(第22図3、図版2-2)をみると、まさに前方部前面西側隅に通路状のものが描かれており、参道の名残と考えられよう。これは現地・墳丘測量図の所見とも合致する。左手に描かれた道は通路②であり、「八幡宮」への参道に該当するものといえよう。

一方、右手の道は平坦面②の建物群に向かうが、平坦面②へと取り付くような位置関係から、第3トレンチで検出された石積遺構の存在が注目される。石積みの設置面は墳丘に向かって上る状況が認められることから、この石積遺構は、まさに「荒蕪図」の右手に描かれている道である可能性が高いと考えられる。ただし、造営当初に構築されたものであるかどうかは、絵図からだけでは明らかにできないので、後に触れたい。

以上、調査や墳丘測量図で確認された遺構や平坦面の位置関係から、本陵の「荒蕪図」は南から描かれており、墳丘と建物や周辺景観の位置関係はかなり正確に描かれているということができよう。左手に見える山は二上山と考えてよい(図版1-1・1-2)。一方、参道の位置については、現状の墳丘測量図から読みとれる所見とは一部齟齬をきたしている。しかし、これは「成功図」において、現地と墳丘測量図で得られ

1 墳丘の所見

トレンチ横の数字はトレンチ番号を示す



第22図 埴口丘陵 墳丘の現況所見図 (1/600)

五

飯豊天皇陵 荒蕪



第22図2 埴口丘陵『文久山陵図写 荒蕪』

四五

飯豊天皇陵 成功



第22図3 埴口丘陵『文久山陵図写 成功』

た所見が裏付けられており、「荒蕪図」で描かれた内容との相違は解消できると考えられる。

## (2) 各土層の年代

本陵築造時の遺物のみを出土するⅨ層の形成以降、墳丘の2次的利用は、遺構や盛土から3段階に分けられる。溝2の掘削から埋没までの時期(Ⅶ層)、表土が形成された盛土と上面に石積遺構が築かれた時期(Ⅴ層)、石積遺構を完全に埋めてしまう厚い盛土(Ⅳ層)である。以下、各層位(遺構)の特徴も述べてつ、各段階の年代を示したい。

**Ⅶ層** 溝2の埋土である。断面の状況から、Ⅴ層が盛土される以前に少なからず削平されていたと考えられるため、本来の正確な規模を明らかにし難い。上端幅は第2・11トレンチでほぼ確認でき約2.5m～3mを測る。下端幅は第11トレンチで確認でき1.8mを測る。深さは第4トレンチで確認されたものが最大であり、1.3m以上に及ぶと考えられる。

遺物量は少ないが、溝2からの出土遺物は中世以前に限られ、近世遺物を含まない。また第12トレンチの溝2床面直上出土の土釜片(第19図89)が13～14世紀代と考えられ、第1トレンチ出土の瓦質火鉢(第19図95)は15世紀代に比定可能である。また中世以前の遺物は埴輪が中心であり、明確な古代の遺物は認められない。以上のことから考えると、溝2のごく一部を調査したに過ぎないので確定はできないものの、もっとも年代が古いと考えられる土釜片が床面直上から出土したことから、その掘削時期は13～14世紀代まで遡る可能性がある。そして、近世遺物を含まないことから中世のうちに埋没したと考えてよいだろう。

**Ⅴ層** 旧表土の存在により厚さが確定できた箇所から、概ね70cm～1mとほぼ均一に墳丘周囲に盛土されたことがわかり、その上面は標高86.2～86.6mの間に収まる。また、多くのトレンチで旧表土であるⅤa層が検出されている。

Ⅴ層に含まれる遺物は、確実に旧表土(Ⅴa)から下で検出されたものであっても18世紀代の遺物を多く含み、第20図122の瀬戸産磁器端反碗の蓋のように明らかに19世紀代のものも存在する。Ⅴ層上面の石積遺構の構築材として使われている瓦も、第20図129の軒平瓦のように19世紀代と考えられる、「八幡宮」造営時期に比べて明らかに時期が下るものが使用されている。後述するとおり、Ⅳ層の形成が「文久の修陵」に伴う可能性が高いことから、Ⅴ層の形成と石積遺構の構築は同時であり、19世紀前半～中頃には行われていたと考えられよう。

**Ⅳ層** 一気に盛土されたものと考えられる。Ⅴ層が19世紀前半から中頃と考えられることから、Ⅳ層はそれ以降に形成されたことは明らかである。

含まれている遺物は墳丘築造以降の各時期のものを幅広く含むが、下限は19世紀後半頃であり、幕末期に近いものが多くを占め、それ以降の遺物を含んでいない。盛土の契機としては「文久の修陵」である可能性がもっとも高いと考えられよう。

以上のように、Ⅴ層とⅣ層では形成時期に大きな時間差は考えにくく、含まれる遺物の様相にも目立った違いは認め難い。

## (3) 本来の墳丘形態(第22図1)

今回の調査は墳丘裾にトレンチを設定したもので、地形の状況などからトレンチの規模に制約があり遺構の検出も断片的なものが多い。よって、本調査の所見のみをもって、本来の具体的な墳丘形態や規模を示すことはできない。しかし、幾つか新たな知見が得られているので、過去の調査成果とも併せ可能な範囲で総合的な理解を試みてみたい。

**後円部** 第6トレンチでは、地山が溝2によって削られているが、少なくとも標高86m付近まであったと考えられる。この高さは第9トレンチなどで確認されている濠底面とかけ離れているうえ、後円部の方が地形的にも低いことから、標高86m付近を濠底面とは考えにくい。よって、第6トレンチの断面で観察される地山は墳丘本体である可能性が高い。第5・7トレンチも第6トレンチと同様の状況を示す。

さらに、第9トレンチの確実な濠底面のレベル(約84.5m)と比較すると、第8トレンチで検出された濠底面の方が高い(約84.7m)ということになる。わずかな違いではあるが、溝2が掘り込まれた上での高さであ

るため、それまでの地山上面はもう少し高かったと考えられる。第8トレンチ(後円部)側が地形的には低いにもかかわらず、濠底面が前方部側面の第9トレンチより高いというのは、やや不可解である。

よって第6トレンチの状況と併せて考えるならば、第8トレンチ西壁で検出された、一見濠底面とも思える地山平坦面は、本陵築造時の濠底面を反映したものではなく単なる溝2の床面である可能性が高い。このことから、第8トレンチ内で検出した地山は後円部の墳丘本体であり、第8トレンチのさらに外側に本来の墳丘裾が残存していた、あるいは残存している可能性が考えられよう。

**前方部** 第1・2・9トレンチにおいてはIV層の下に溝2が検出され、第9トレンチでは本来の濠底面が検出された。しかし、本来の墳丘裾や墳丘斜面は認められない。この時点で、本来の前方部側面が現墳丘裾の内側にあることは明らかである。

具体的には、第12トレンチでは標高86.3m付近で墳丘本体と考えられる地山が確認されている。一方、第1・2トレンチではそれより低いレベルであるにも関わらず濠内堆積土が確認されている。このことから、前方部南側面の斜面が第2トレンチ付近まで延びてくる可能性は低く、本来の前方部側面裾も第2～12トレンチ間、もしくは第2トレンチの最奥部付近をさらに掘り下げた位置にあると判断される。そのため、前方部南側面は現墳丘裾より5m程度内側に位置する可能性が考えられる。第9トレンチの濠底面がどこまで現墳丘内に入り込むのかは不明だが、第10トレンチでは現墳丘裾に極めて近い位置で、溝2の墳丘側への落ち込みを確認している。第11トレンチでの溝2の幅などを参考にすれば、本来の墳丘裾は少なくとも2m程度は内側にあると推測される。前方部の北側面と南側面では、現状と本来の墳丘裾の位置関係が異なることが推測される。

いずれにしても、これらのことから、本来の前方部墳丘裾は現状の墳丘裾よりも内側にあると考えてよい。

また、後円部と前方部では検出された溝2断面の立ち上がり、逆転することが指摘できる。すなわち、前方部側のトレンチは、墳丘裾の位置が現状とほぼ同じ箇所と考えられる第11・12トレンチと溝2が未確認の第3トレンチを除く、第1・2・9・10トレンチで墳丘の外に向かう立ち上がりが検出されているが、後円部側の第5～8トレンチでは、墳丘に向かう立ち上がりが検出されている。これは端的に本来の墳丘裾の位置を反映している可能性があろう。また、くびれ部に設定した第4トレンチと第8トレンチで、溝2の立ち上がりの検出状況が逆転しており、本来の墳丘裾が均等の幅で失われているともいえない。併せて、推定される本来の前方部側面の裾の位置が、北側面と南側面では現状の墳丘主軸を挟んで対称の位置関係にないことは既に述べた。全体に前方部南側面の方が、現墳丘裾からみて奥まった位置にあるといえる。単に本来の墳丘裾が内側に位置するだけでなく、現墳丘の主軸が、本来の墳丘主軸とは少なからずずれている可能性を示唆していると考えられよう。

なお、造出については、今回の調査範囲内で存在を示すような所見は認められず、その有無については明らかにできなかった。

以上をまとめると次のように整理できよう。

- ・後円部は、主として溝2の掘削によって本来の墳丘裾がかなり削られたと推測される。よって、形態・規模とも本来の状態とはかけ離れたものになっている可能性があり、本来の後円部径は現状より大きくなると思われる。これは外堤の調査によって得られた、周濠が外に広がるといふ所見とも合致する。墳丘全長は現状の83mより伸びると考えられるが、具体的な平面形態を示し得るものではない。
- ・前方部側面については、北側面・南側面ともに現墳丘裾の内側に位置すると考えられるが、南側面の方がより奥にあると考えられる。
- ・前方部前面については、築造時の墳丘裾と現墳丘裾はほぼ一致すると考えられる。
- ・溝2の検出位置などから、本来の墳丘主軸は現墳丘主軸からはずれている可能性が考えられ、その場合後円部が現状より南に振れていると考えられる。

#### (4) 墳丘変遷の諸段階

墳丘の変遷過程は、(2)でも示したようにおおむね以下の3段階に分けられよう。

〔第1段階〕 墳丘の流出により形成された堆積土(Ⅷ・Ⅸ層)に対して、墳丘裾に沿うように溝2が掘り込まれて、それが自然堆積によって埋没した段階。中世遺物を含む(Ⅵ・Ⅶ層)。

墳丘全周に溝を廻らせるという行為から、墳丘上に何らかの防衛的施設の存在を想定させる。ただ、中世遺物は細片であり量も極端に少ない上、遺構も溝以外に確認されなかったため、中世における活発な活動を積極的に示すような痕跡とは言い難い。しかし、「八幡宮」の造営により墳丘が原形を留めないほど改変されていることを考慮すれば、中世における何らかの施設の存在を、完全に否定するものではない。

〔第2段階〕 第1段階で形成された地表面上に、粘質土を中心として新たに盛土された段階(V層)。

後円部では確認されていないが、前方部からくびれ部の範囲では標高86～86.5mでほぼ平坦に整えられていたことが、旧表土(Va層)の存在から確認される。墳丘全周に及ぶと考えられる比較的大規模な盛土である。盛土内に含まれる遺物は本章(2)で示したとおり19世紀中頃までに収まると考えられるものである。「八幡宮」の造営を契機として、墳丘に大幅な改変が加えられたことは本章(1)で述べたとおりであり、調査時点では、V層の形成や第3トレンチの石積遺構の構築が「八幡宮」の造営工事の一環である可能性も考えたが、含まれる遺物には明らかに18世紀代のものが相当数を占め、19世紀代のものも認められたため、すべてが社殿造営と同時であったという見方は否定される。上田長生氏は、文政13(1830)年や嘉永2(1849)年の記録から「八幡宮」は当該地域において宗教的に重要な場であったと指摘しており<sup>(15)</sup>、このような背景から造営後にも周辺の整備や施設拡充が行われて、最終的に「荒蕪図」に描かれたような姿になったというのが実態であろう。

ただし、当初は「八幡宮」が遷座した墳丘上面の改変に留まっており、次の大きな改変は19世紀代である。継続的に整備・拡充がすすめられていた訳ではないようである。19世紀に入り「八幡宮」を取り巻く環境に、墳丘周辺の整備を行う必要性が高まるような、何らかの変化が生じた可能性が考えられよう。先述の上田氏の指摘でも記録が残るのは19世紀前～中頃であり、V層の形成時期と一致する可能性が高いことは興味深い。

〔第3段階〕 「八幡宮」を撤去し、それまでの地表面を完全に埋める厚い盛土が行われる段階(Ⅳ層)。

「文久の修陵」に対応すると考えられる。この段階で現在の墳丘の平面・立面形態が最終的に形成された。出土遺物は、江戸末期までに限られる。 (清喜裕二)

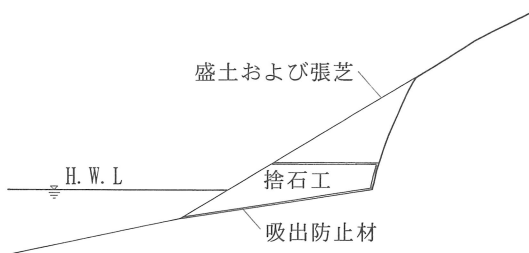
## まとめ

### (1) 工 法

調査の結果を踏まえ、捨石工法を行うことに決定した(第23図)。使用する石材は、本陵の遺構などで使用されている石材と区別できるように、奈良県芦原産の花崗閃緑岩を選択した。捨石上面を満水位より20cm高い位置で水平に整えた上に、墳丘斜面になじむような傾斜で盛土を行い、表面を芝で覆った。

### (2) 調査成果

現在の墳丘は、「八幡宮」の造営によって形成されていたと考えられていたが、今回の調査で新たに中世の溝(溝2)と江戸期における2段階の盛土を確認したことで、中世以降段階的に改変されていたことが判明した。また、本陵の築造時の姿に関する知見も幾つか得られた。以下、今回の調査によって明らかになった点について列挙したい。



第23図 埴口丘陵 護岸工事設計図(1/60)

- ① 本陵の墳丘改変の過程は、盛土などの層位と含まれる遺物の年代から3段階に分けられることが判明した。その時期はおおむね中世後期、近世前期、近世後～末期に該当する。
- ② 大規模な改変を受けていたため、本来の墳丘面を検出できた箇所は1箇所もなかった。また、現状の平坦面も本来のものを反映している可能性は非常に低いと考えられる。
- ③ 墳丘の平面形態は、盛土により形成されていることが

判明した。よって、現形態が本来の墳形を反映している可能性は低い。

- ④ 本来の墳丘面は確認できなかったが、Ⅸ層中に転落してきたと考えられる石材が少なからず検出されたことから、葺石があったと考えられる。石材は、葛城山麓で採取できる石英閃緑岩である。
- ⑤ 本陵築造に伴う遺物として埴輪・須恵器・土師器がある。埴輪は、過去の調査では外堤側で人物埴輪など形象埴輪の破片が出土しているが、今回の調査では明確な形象埴輪の出土はなかった。また、同じく外堤側で出土した笠形木製品などの木製品も出土していない。(清喜裕二・加藤一郎)

#### 註

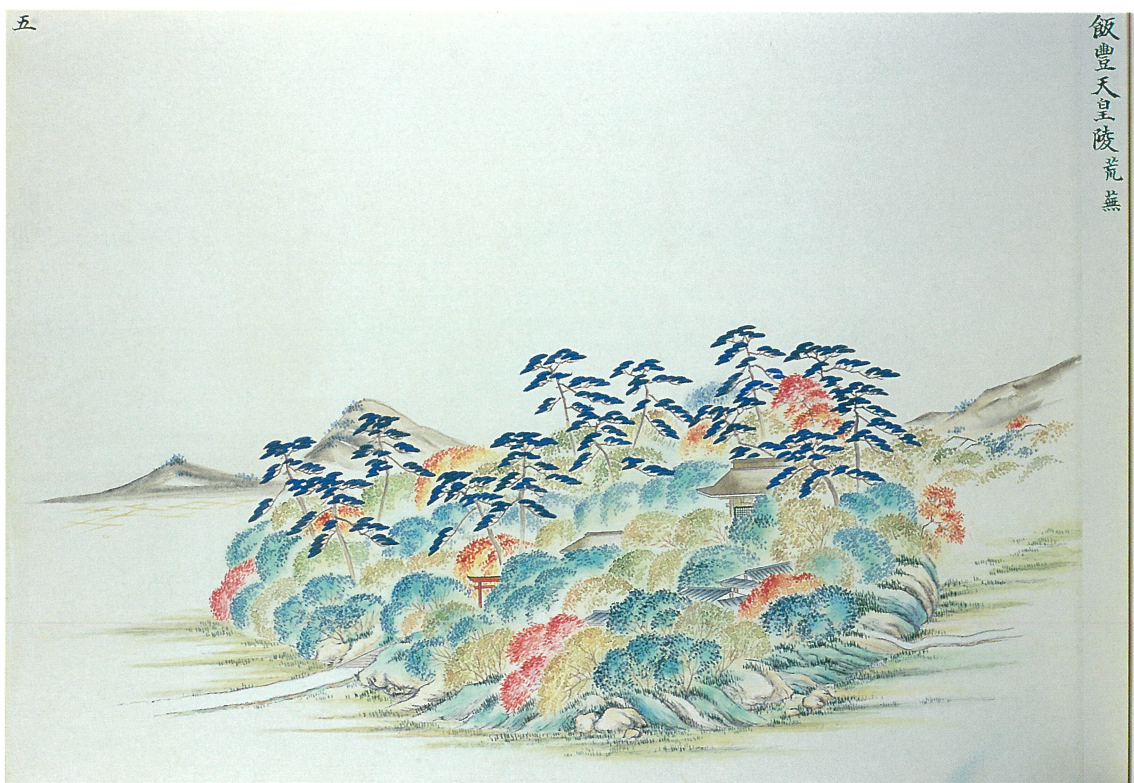
- (1) 藤田和尊「飯豊皇女陵」『「天皇陵」総覧』歴史読本特別増刊・事典シリーズ〈19〉、新人物往来社、1993年。
- (2) 今尾文昭氏は、明治12年の『御陵図』上に石が描かれていることから、横穴式石室の存在の可能性を考えているが、該当するその石材は、大きさなどから「八幡宮」に伴うものと判断できる。  
今尾文昭「北花内大塚古墳」『天皇陵古墳』、大巧社、1996年。
- (3) 河上邦彦「新庄町飯豊陵外堤の調査」『奈良県発掘調査集報Ⅱ』奈良県文化財調査報告書30、奈良県教育委員会、1978年。  
土生田純之「埴口丘陵外堤の樋管改修箇所の調査」『書陵部紀要』第31号、宮内庁書陵部、1980年。  
土生田純之「埴口丘陵外堤護岸工事区域の調査」『書陵部紀要』第32号、宮内庁書陵部、1981年。  
土生田純之「埴口丘陵整備工事区域の調査」『書陵部紀要』第34号、宮内庁書陵部、1983年。
- (4) 飯豊天皇陵の修陵は、元治元年10月着工、慶応元年2月竣工であるが、便宜上このように呼称したい。以下同じ。
- (5) 前掲註(3)文献のうち、本誌第31・32・34号に掲載された報告。
- (6) 通常、「板オサエ」などと表現されることからこれにしたがったが、8、9の資料のみについていえば、板のような木目の痕跡ではなく藁のようなものの痕跡であると考えている。ただし、指に巻いたのか、板に巻いたのかなど、具体的にどのような方法であったのかは不明である。
- (7) 30は小片であるため確証はないが、藤井幸司氏が指摘する奈良県天理市荒蒔古墳や小墓古墳で見られるような「アトランダムな小孔を乱雑に穿孔する」一例となるかもしれない。  
藤井幸司「円筒埴輪製作技術の復原的研究－窖窯焼成導入以降を中心に－」『埴輪－円筒埴輪製作技法の観察・認識・分析－』第52回埋蔵文化財研究集会実行委員会編、2003年。
- (8) 鐘方正樹編「菅原東遺跡埴輪窯跡群をめぐる諸問題」『奈良市埋蔵文化財調査センター紀要』1991、奈良市教育委員会、1992年。  
なお、今回の出土埴輪のなかで「断続ナデ技法B」が確認できる資料はこの破片のみである。
- (9) 川西宏幸「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』第64巻第2・4号、日本考古学会、1978・79年(『古墳時代政治史序説』塙書房、1988年に再録)
- (10) 前掲註(8)書。なお、32以外の資料でも「断続ナデ技法A」かと思われるものは存在するが、突帯調整によるナデでほぼ完全に消されてしまっているものがほとんどである。
- (11) 宮内庁書陵部陵墓課編『出土品展示目録 埴輪Ⅴ』2006年。15頁(36)下参照。
- (12) 奈良県立橿原考古学研究所附属博物館編『大和考古資料目録』第15集、1988年。31頁参照。
- (13) 類似資料は愛媛県松山市播磨塚天神山古墳などでも出土している。
- (14) 菅原正明「畿内における土釜の製作と流通」『文化財論叢』(奈良国立文化財研究所創立30周年記念論文集)、同朋舎、1983年。
- (15) 上田長生氏は、「八幡宮」における祭祀・管理の変遷から近世以降における本陵の様相を明らかにしている。  
上田長生「幕末維新期の陵墓と村・地域社会－飯豊天皇陵の祭祀・管理を事例に－」『歴史評論』No673、歴史科学協議会、2006年。

## 参考文献

- 近江俊秀「大和瓦質摺鉢考」『研究紀要』第2集、(財)由良大和古代文化研究協会、1994年。
- 九州近世陶磁学会事務局編『九州陶磁の編年－九州近世陶磁学会10周年記念－』九州近世陶磁学会、2000年。
- 佐藤重聖「大和における瓦質土器の展開と画期」『中近世土器の基礎研究』XI、日本中世土器研究会、1996年。
- 白神典之「堺播鉢考」『東洋陶磁』19、東洋陶磁学会、1992年。
- 立石堅志・森下恵介「大和北部における中近世土器の様相－奈良市内出土資料を中心として－」『奈良市埋蔵文化財調査センター紀要 1986』、奈良市教育委員会、1987年。
- 立石堅志「大和北部における中世土器について」『中近世土器の基礎研究』V、日本中世土器研究会、1989年。
- 難波洋三「市坂の土器作り」『京都大学構内遺跡調査研究年報1986年度』、京都大学埋蔵文化財研究センター、1989年。
- 三好美穂「南都における平安時代前半期の土器様相－土師器の供膳形態を中心とした編年試案－」『奈良市埋蔵文化財調査センター紀要 1995』、奈良市教育委員会、1996年。
- 山川 均「漳州窯系陶磁器に関する編年的研究」『大和郡山市文化財年報・紀要』、大和郡山市教育委員会、1994年。



1 埴口丘陵 遠景（南から 右手前が墳丘、左手奥が二上山）



2 埴口丘陵『文久山陵図写 荒蕪』

図版2



1 埴口丘陵から見た葛城の山並み



2 埴口丘陵『文久山陵図写 成功』

1 埴口丘陵  
第1トレンチ  
土層断面

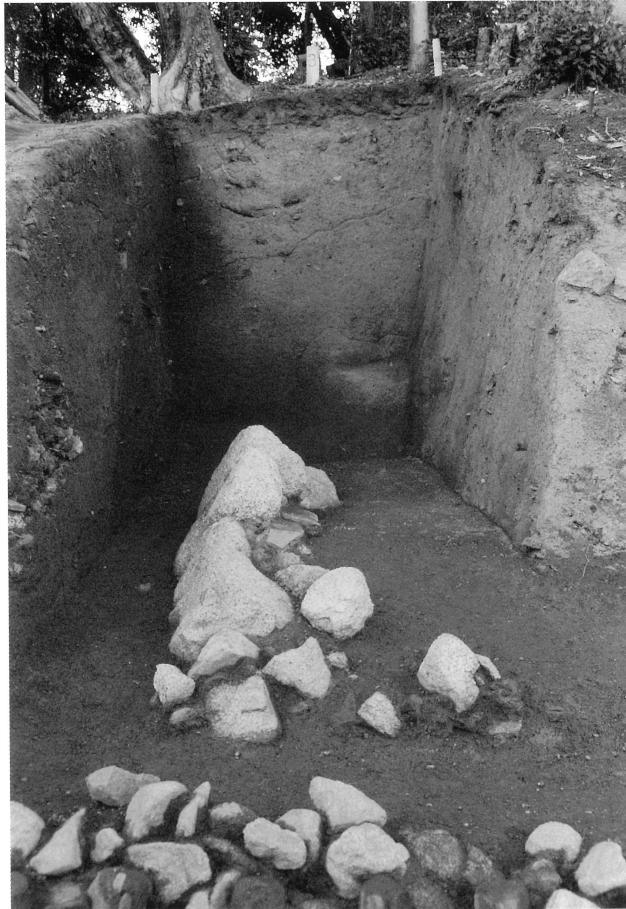


2 埴口丘陵  
第2トレンチ 全景

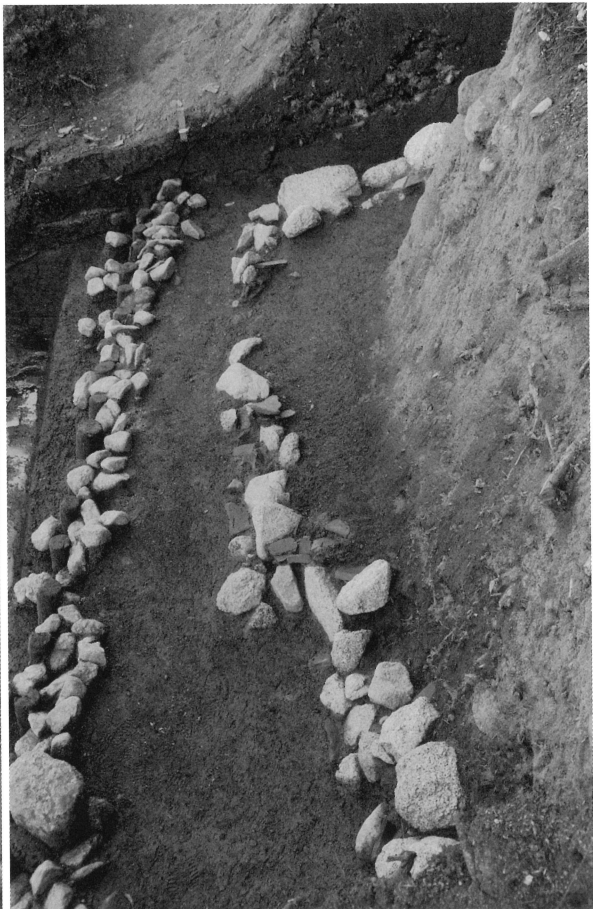


3 埴口丘陵  
第3トレンチ 全景

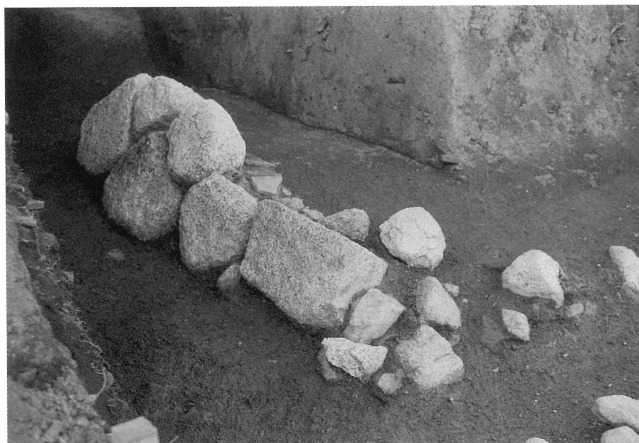




1 埴口丘陵 第3トレンチ 石積遺構と盛土 (IV層)



2 埴口丘陵 第3トレンチ 石積遺構



3 埴口丘陵 第3トレンチ 石積遺構 (詳細)



5 埴口丘陵 第3トレンチ 石積遺構の瓦



4 埴口丘陵 第3トレンチ 断割土層断面

1 埴口丘陵  
第6トレンチ  
土層断面



2 埴口丘陵  
第9トレンチ  
土層断面



3 埴口丘陵  
第9トレンチ  
Ⅸc層直上転落葺石  
検出状況





1 埴口丘陵  
第10トレンチ  
大正期護岸杭列  
検出状況



2 埴口丘陵  
第10トレンチ  
完掘状況



3 埴口丘陵  
第10トレンチ  
完掘状況



1 埴口丘陵 第10トレンチ 倒木検出状況（北から）



2 埴口丘陵 第11トレンチ 土層断面

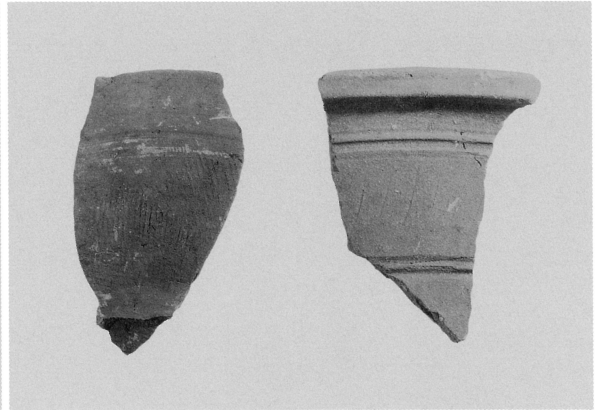


3 埴口丘陵 第12トレンチ 土層断面

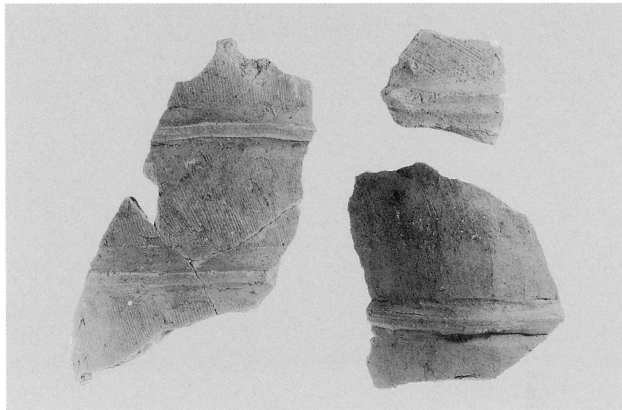
図版8



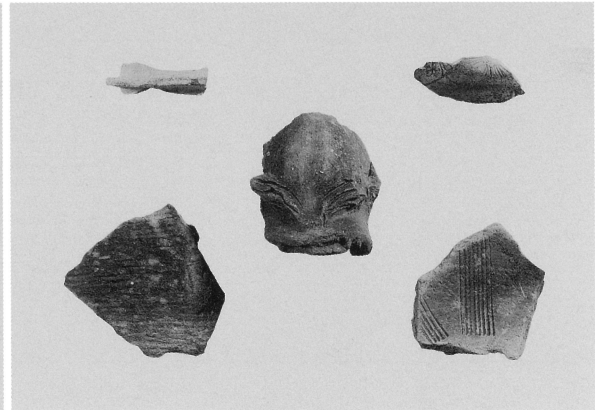
1 埴口丘陵出土品 円筒埴輪（底部）



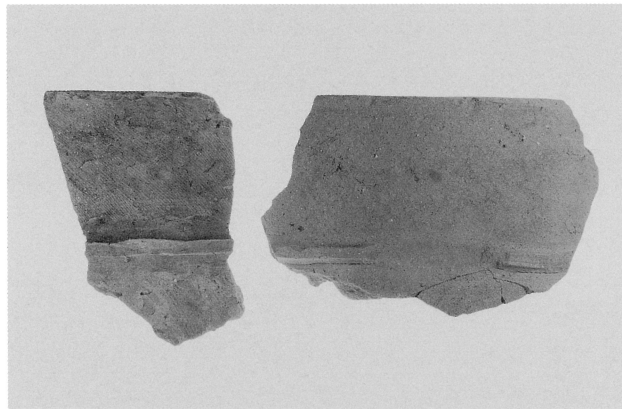
5 埴口丘陵出土品 須恵器



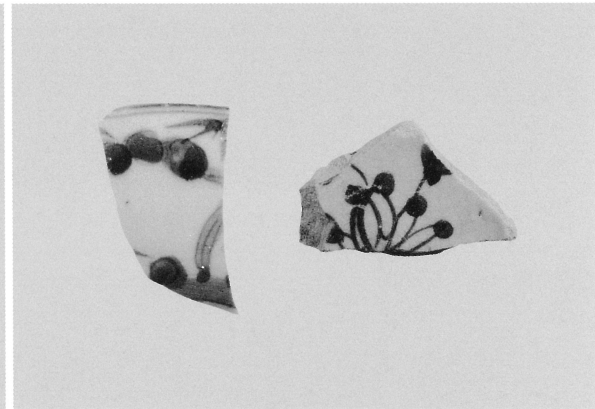
2 埴口丘陵出土品 円筒埴輪（胴部）



6 埴口丘陵出土品 中世遺物



3 埴口丘陵出土品 円筒埴輪（口縁部）



7 埴口丘陵出土品 磁器



4 埴口丘陵出土品 不明埴輪



8 埴口丘陵出土品 瓦